



## 翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」

藤 村 潤 一 郎

ここに「寛保元・二年 手板組中日記」として翻刻する史料は、郵政研究所附属資料館所蔵「駅通志料」<sup>(20)</sup>（整理番号 SBA-20）に含まれているものである。なお写本が「駅通志料」<sup>(21)</sup>（SBA-22）にある。<sup>(1)</sup>

まず寛保元年分は、明治期に付けられた表紙に、「宿駅日記」の題簽と、「駅伝ノ部 郵便博物館図書第 号第 函 第 架六冊一 辛寛保元年酉八月 宿駅日記日用留」と書かれたラベルがある。この表紙以外は近世の簿冊であり、そこには表紙に「日用留巻番 辛寛保元年酉八月吉日」とあり、多湖の朱認印が捺されている。裏表紙には「手板組」と記されている。

寛保二年分は表紙に「宿駅日記」の題簽と、「駅伝ノ部 郵便博物館図書第 号第 函第 架六冊二 壬寛保二年 戌三月吉日宿駅日記日用留」のラベルがあり、近世の簿冊分には表紙に「日用留第二 壬寛保貳年戌三月吉日」とある。

従ってこれは手板組中のもので、朱認印の主は東京の定飛脚問屋島屋島谷喜右衛門の名代多湖三郎兵衛である。<sup>(2)</sup>

写本の寛保元年分は、表紙に「寛保元年 宿駅日記 一」「第卅七帙入十三冊之内」「和第二百卅六号 共十二冊」

「駅伝ノ部 郵便博物館図書第一八五號第八函五架 寛保元年定飛脚日記 外ニ単一 十二冊一」と書き、「駅通局

図書和第二六三號共一二冊」の朱印が捺されたラベルがある。本文は駅通局の朱罫紙が使用され「駅通局図書印」の朱印がある。内容は前記の宿駅日記と同じものである。従って写本の方が本来の意味での駅通志料である。明治一四年九月凡例、駅通局御用掛青江秀編次「大日本帝國駅通志稿考証」に、以下しるす寛延二年などの分を「定飛脚日記」として引用しているので、駅通志料が何故に宿駅日記としたかは不明である。原本は寛保元年から延享四年迄の六冊、写本は寛保元年から宝暦四年迄と、宝暦二、八両年の号外との一三冊がある。寛保三年以降は後日機会があれば翻刻したい。

翻刻に当っては、平出、抬頭、欠字はその儘とし、変態仮名は現行の字体に改め、古体、異体、略体の文字は現行の文字に改めたものが少なくない。本文において翻刻に際して人名など順序が不安な箇所は（ ）付の註釈を付した。また文字の読み方の判然としない箇所は□を以て示し、（読不明）（カ）の傍註を付した。本文中、欠損の箇所は□を以て示し、（虫損、破損）と傍註した。なお表紙を付する際に原本の天地が切断されている疑がある。朱書、後筆、加筆、抹消については、（朱書）（後筆）（加筆）（抹消）と傍註し、関係部分に「」を付けて示した。貼紙は「」でその位置を示し、（貼紙）と傍註し、記入箇所はその表示箇所になるべく近接して行なった。丁数を（数字）で示し、その表、裏を（オ・ウ）として本文中に記るした。全文に亘り原本にない句読点を補った。

最後に翻刻を許可された通信博物館及び同館員の方々、橋本輝夫氏、参考史料の使用を許可された国立史料館に感謝します。

註

- （一）郵政省通信博物館「資料目録」図書編（下）昭和57年4月、一六三頁
- （二）手板組については拙稿「島屋佐右衛門家声録について」交通史研究一四号参照

(表紙表)

「辛寛保元年

(朱後鑑)  
「此年文化二丑年迄

六十五年ニ成ル」

日用留書番

(朱後鑑)

「酉八月ヨリ  
一戌二月迄」

(朱後鑑)  
「大茂一件有之」

酉八月吉日

(表紙裏・白紙)

(1オ)

控

(朱「多翻」)

(印)

一 毎日用之儀并商賣筋之儀ニ付末々迄も用立候儀は、  
居合之内心付候而此日記江留置可申事

酉夏々戌三月廿六日迄

(1ウ・白紙) (2オ)

一 夏之頃、大茂徳居三十間堀三田屋清兵衛殿方用事、山

翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」(藤村)

城や并、取付申候而もめ合、早状なと山宗名目ニ而ハ、  
仲間へ請取不申候而、いつミヤ方へ頼候而、夫々出申  
候処、段々誤り証文ニ而、相濟候、則証文ハ、

一 又若狭屋仁右衛門請合候登候物、山城や江請取候由、

大茂ニ承候へ共、槌成品難知ニ付、大茂が智略ニ而作  
状捨候而、日雇方へ遺候而、夫々仁右衛門江相渡候所、

仁右衛門が山宗へ持参、則飛脚府中へ相届候物持行候  
処、府中日野やニ而届所難知候付、大茂へ戻候由、是

が委細知申付依之(2ウ) 山宗が証文致させ可申相談  
候へ共、此度ハ山宗斗之証文ニ而ハ相濟不申、七軒や

が証文被致候ハ、了簡可致と申ニ付、取扱之証文致、  
可遣相談在之候而、案紙等出来候所、七軒寄合度々之

上、京弥、木六兩人大茂へ参候而、取扱証文等も見せ  
候所、了簡不仕候、然所、第一若仁不屈者故、御願申

上候と申候付、十七屋家之大屋ハ、則若仁女房之親ニ  
而、此者聞付候而、名主助左衛門殿を挨拶頼候処、若

サや斗之筋ニても無之、仲間ニも出入在之由、左候へ  
ハ、仲間衆中も一同ニ、名主助右衛門殿を相頼呉候様

ニ、大屋被申候付、相談之上内々ニ而可済(3オ)事  
 ニ候ハ、と申事ニ而、一同ニ名主へ相頼候へハ、罷出、  
 此方へ証文致候様ニと、下書出候、此下書之趣ニ而、  
 印形難成候付、其段申、漸文言増減仕候而相済候上、  
 名主を手紙相付 勘右衛門へ対談仕候処、此度之義、  
 仲間堅メ之ためニ御座候間、此方が堅メ之案紙可遣と  
 申候而、其後名主迄、七軒屋の証文と、若仁の証  
 文と下書、則名主を仲間之者共へ、御渡し在之候処、  
 別紙ニ具一卷在之候、此趣印形成かたくニ付、度々寄  
 合も御座候へ共、いづれも不同心、山宗斗ハ可仕所存  
 ニ候得共、残りハ不同心、依之相談之上、如此成証文  
 ニて候ハ、可仕と(3ウ)相認差遣候処、埒明不申  
 候付、十月五日ニ名主殿へ、右差遣候証文之通ならて  
 ハ、外ニ得不仕候と、申切候所、然ハ、此方へ差越候  
 下書も、持帰候様ニと被申候而、此方が遣候証文下書  
 も、五日夕ニ御戻し被成候  
 一十月上旬、伏五の仲間不殘寄合付候所、此度いつミヤ  
 甚兵衛殿ニハ、手前出入酒井雅楽頭様御用向、請取扱

申候、行司大茂迄断被申候、如此成事も在之候付、弥  
 々右之証文印形候事、出来不申候旨、名主へも入候  
 一十月八日、名主が十七屋、手前兩人呼寄、先達而之証  
 文(4オ)之趣ニ而ハ、印形難成と申事、一通相認此  
 方へ差出候様ニと被仰渡候、此方も、先方へ可申遣返  
 答も無之候、殊更及延引候事共と被申候付、寄合在之  
 候へ共、是以証文難成旨、皆々申候、山宗除ヶ置候而  
 相談在之候

一十月九日、寄合双方メり不申候付、銘々名主互廻、

新寄之断申出候筈ニて、此夕立別レ候

一十月十日ニ、後藤宗右衛門殿を金貳百兩調候印形左衛門 新右衛門

不問三、正月卅日迄判一半定

一十日ニ、十七屋が被申候ハ、名主互相済不申候、返事  
 斗申候而ハ、難済、承合候所御座候而聞候へハ、いつ  
 れ共、先方が来候下書ニ、品付ヶ不申候而、とかく印  
 形成かたくと斗ニてハ、重而公辺之砌越度ニ可成よし  
 承候、其上名主も、先方へ此方が申遣様無之候間、  
 仲間之者印形不成候と申義、紙切ニ書付印形遣候様ニ

とも在之候間、今(4ウ)一応相談可仕候哉、手前、十七や兩家、内寄合仕度と被申候而、十日二十七屋、手前、横町ニ而寄合、十七や吉兵衛、武兵衛も被參候、扱、ふしミや、十七やへ手前來候へ、今日、名主へ断申出候筈之所、暫相待候様ニとの内意、被仰遣候、いか、返事可承候と申手紙來候所、弥、ふしミや、京弥、木六ハ印形可仕と申断候由ニ付、先弥留申候而寄合所へ申入、泉やも呼、山宗ハ除置申候而、相談仕候趣へ、右、伏五、京弥、木六印形可被成候ニ印形被成候由、先方下書ニ可被成候や、又ふしミや先方之下書御直し被成候哉と、承候へ、いつれニても可仕候、此方共へ、身上相続かたく、はりやい申心もなく、只今印形いやと申候へ、公義ニ成候、又只今印形仕置候而末々ニ至候て、公義ニ可成と存候へ共、又末々ニ而へ、いか様共、了簡出來可申候間、(5オ)先此度印形仕候而、仕廻可申と存候と、了簡相極候而、只今名主へ出可申心ニ候所、預御尋候付、罷越候と被申候、先達而被仰候趣とへ、違候と申候へ、京弥被

申候へ、此度名主へ如此申出候事へ、好申にてハ無之、なみだにて出候、無是非存候、此上へ、此方共向へ、たきこまれ申たる者共と思召候而、又各々相談承度候と被申候付、此方ハ十七や、嶋や兩人名主へ相立不申候付、いつれとも、一通向へ出候、下書評ヲ付候而差遣、一同ニ申出候所存にてハと、申候へ、成はと左様ニ被成候へ、いか様共可仕候と、被申候付、十一日ニ名主へ下書有之候ヲ、かり申筈ニ候、いつミや事へ、始終印形仕候而、差出候事へ成かたく、申出候通、此夕ニても、名主へ申出候へ、罷不成候旨、可申出と存候所、呼ニ被遣候、此上ハ(5ウ)下書直し、かためハ堅メニ而、八人一同ニ印形仕、誤りハあやまりニ、一通印形仕候事、一同ニ候へ、いか様共と申付、其通とて退候

十月十一日、横町ニ而寄合仕候、山宗除ケ、先、十七や、手前、名主へ先方之下書かりニ參候処、名主留守にて、手代衆挨拶ニハ、先達而被仰候砌、写も可有之事候間、夫を以存寄書付來候へ、可然と申由、夫

を双方打寄、相談之上、仲間堅メハかため、誤り在之人の証文ハ、又外一通、かため事ハ八人一同ニ判取、扱証文ハ本人共ニ七人印形ニ而、大茂へ可遣と申事ニ成候而、仕廻候

一十二日朝、名主を呼来候由にて、十七やを呼来候、返事急ニ可仕旨、被申付候而、(6オ)六人寄合、ふしミやを下書直し、七人一同ニ印形可仕旨、申遣候

一十二日、伝馬町白子やを被仰渡候、先達而賃銀之義、老父つゝ引下ケ、是非く請合候様ニ、被仰渡候

一十四日、名主を如此障入候而ハ、今更向を来候ヲ直し、此方を作候て難遣候とて、御戻し被成候

一十五日朝参候様ニ、名主を申来、十七屋、手前罷越候而被申渡候ハ、何分向へ可申遣候様無く間 向の之証文ニ張紙仕候而、差越候様ニと被申付候、十七屋相談之上、張紙仕候而、今日名主へ遣候又外ニ

一十五日、張紙仕候而遣候ニ、仲間爲取替置証文一通相認、是ハ仲間かため之ため、互ニ取候証文にて候間、御遣可被下と申遣候

一十六日、右之証文之義、今日昼迄も、何共不申参候処ニ、名主を(6ウ)大屋次郎兵衛へ丁代来候ハ嶋や左右衛門と申ハ、直ニ佐右衛門ニ候哉、又ハ名代にて候哉と、申訳申来候而、久兵衛大屋へ被参候、入訳咄被申候、先達而牧野様ニ而も、此訳申上候事、大坂ニ而も津十右衛門義ハ、御公儀にて申上候品も有之と申遣候、大屋夕方名主へ可参由、被申候

一十六日八つ時ニ、名主を申来候而、十七や、手前被参候処、手代挨拶之由、先達而下書ニ張紙被致候付、今日先方へ、助右衛門持参可仕候、然所先方を出し候証文ならてハ、難済と申候ハ、いかゞ改候哉、印形兩人共被致候哉、又ハ直し張紙仕候の外ニハ、難成と申心底ニ哉と、尋被申候付、手前義ハ(7オ)張紙仕候様ニと被仰付、張紙仕候、此上ニも印形仕候而も、不苦候義、印形可仕候様ニと、助右衛門様被仰上候、可仕候と申候、十七やハ、先方の之趣ニ而ハ、印形成かたくト申、夫にて済かたく、何レ共鍵ニ申来候様ニと被申付、帰相談仕候所、致かた無之、最前久兵衛被申

候、口上可然と申遣候、十七や一同、可然と申事候

一十七日、美濃部様、森山様<sup>立</sup>看進物、用人へたはこ式  
斤つ、遣候

一八軒会所にて、夕寄合候様ニ相見へ候付、十七詞候所、  
是ハ無其儀候

一十八日、十七此方へ來候

一十九日夕方、十七<sup>ハ</sup>呼來候、木六、京弥、伏五、山宗、  
大茂、八軒、会所にて寄合申候、内証名主にて在候由

一廿日戎講

一廿一日、本町大和や荷及延引、手前<sup>(出)</sup>次兵衛ト、大和

や<sup>ハ</sup>一人向ニ道迄遣し、やとひ源七と申者下り候、六  
日出八日切

一廿一日、御名代松平肥後守様御帰府被成候

一廿一日、泉甚、十七、手前、八軒にて大茂<sup>ハ</sup>下書格別

ニ來、江戸や吉郎兵衛<sup>ハ</sup>証文取可申由下書來、泉甚加  
印相談、泉甚合点不仕候、別紙ニ写有之

一廿二日夕、大伝馬願之義、埒明不申候段、白子やにて  
被仰渡候

一廿三日、美濃部勘兵衛様用人幸左衛門殿、請合証文判  
取ニ被參候、佐右衛門一判也

一廿五日夕、名主殿へ、是迄之御せ話之段御礼ニ參候、  
乍此上御支配下候義ニ候間、奉願上候と申置在之候

一同夕、大伝馬町白子や、升や<sup>立</sup>御請申候断ニ參候、錢  
三メ七百四拾五文へらいノ時

一廿五日、銀座<sup>立</sup>証文遣候、井福嶋印鑑証文加判ハ(8  
オ)堀留五兵衛被致候、文言委細諸用帳ニ在之候

一同日、御名代酒井左門様今朝御帰府被成候

一廿六日、かの屋宗左衛門登候筈、仲間之内出入有之付  
及延引、代り多兵衛上り申候、五太乘にて

一十月廿七日ニ、江戸屋吉郎兵衛被參、私儀、此度不勝  
手ニ付、京都近江屋喜平治取次相止申候、一切商賈不

致候、爲御断參上仕候と、被參候由、宗助承之

一同日、京都近江屋喜平治手代弥兵衛參り、此度江戸屋  
吉郎兵衛不勝手ニ付、私方之取次相止候と申越候ニ付、

文通ニ<sup>而</sup>ハ難濟、昨夕下着仕候、京都<sup>ニ</sup><sup>(往)</sup>大黒屋庄次  
郎殿義、用事も被仰付被下候ニ付、「何角」先御見舞



申上候、宿ハ江吉方ニ罷在候

一同日、小池屋市右衛門様番頭衆、上方へ御登り被成候  
ニ付、見セ中へ留主見舞ニ弁当遣候、此造用凡五百銅  
斗、丹生氏料之

(8ウ)

一廿七日、大伝馬町一丁目行司白子屋ヲ申来候ハ、登セ  
ちん銀之義、当晦日ニ受取候哉、又暮受取候哉と申来  
候ニ付、此方ヲ申上候ハ、当晦日ニ御拂被下候方有之  
候ハ、受取可申候、夫共、左様ニても無之候ハ、当  
暮ニてもくるしからず段、申上置候

一同日、美濃部様、森山様御用被仰付候付、爲御礼、久  
兵衛参上致候

一同日、酒井修理大夫様御役人小嶋武伝次様、国元へ御  
登り被成候付、跡役藤井清次郎様と、御方御代り被成  
候付、御祝義として鮮鯛三枚差遣ス

「(以下二項抹消)」

一同江戸屋吉郎兵衛商賣不勝手ニ付、近江屋喜平次方之  
取次も、自今得不仕候との断ニ来候、仲間中廻り候由

(註不明)

一同近江屋喜平次手代弥兵衛も、今日来候、私夜分下着

仕候、(9オ)吉郎兵衛相仕廻申付、罷下り候、京都

大黒屋ノ之届物請申候而、御届申候付、参上仕候との

口上、旅宿ハ吉郎兵衛方ニ居申候由

廿八日

一安藤様役人横堀殿、青木殿兩人へ進物肴遣候

同

一宗助、有田殿書付写取遣候

同

一大伝馬行司白子やヲ被仰渡候、是迄町内賃銀、卅日ニ  
相渡可申候との断ニて

同

一大伝馬町ちん銀改候ニ付、鈴木源一様へ断申上候趣ハ、  
御手前様御義ハ、賃銀当座ニ御拂被下候、然所此度老  
奴下ニ罷成候「是迄」七月後(抹消)、ちん銀之義、何とそ

御用捨被下候様ニ、御願申上候所、追而及相談、可申  
進との事ニ御座候

一鹿嶋太助殿、御登り被成候付、餞別として、足代貳百  
文遣次候

(9ウ)

廿八日

一竹屋太右衛門様、去頃御登り被成候事、跡にて承候付、  
当方より足代遣候、尤式百文

同

一大茂方件之義ニ付、今日罷出候旨、十七屋より証にて  
しらせ有之候

一左在之候通、大伝馬賃銀、十月卅日請取申候

一酉十月廿九日ニ、大坂屋茂兵衛 牧野越中守様出詔仕  
候、右之詔書、去方より到来致候由にて、十七屋孫兵衛

殿より、十一月朔日夕申來候、宗左衛門、宗助兩人参

候而内見之

一関兵部様御名改候ニ付、御知行所より御用向請負証文御  
取替被遊候、十一月二日ニ、古証文持参被成候而、致

替差上申候

御請負申上候証文之夏

(10才)

一江州御知行所より御当地へ御下し被遊候御荷物、并御状

金銀等、同国水口宿小豆屋伝左衛門方へ御渡し被遊候、

私飛脚ともへ爲請取、無相違御届可申上候、万一道中ニ

て紛失仕候ハ、其品々相改、急度相弁差上可申候、爲  
後日、請負仍而如件

寛保元年酉十一月二日

嶋屋

佐右衛門

関織江様御内

吉 住彦兵衛様

鳥 居權左衛門様

佐久間佐次兵衛様

吉 田藤左衛門様

(10才)

一酉十一月三日、大坂近江屋弥兵衛儀、此度木原店辺ニ

見世出シ候由ニ而、見世迄見へ被申候

一同三日、大茂方より善助見へ申候而、本町大和屋方賃銀  
之儀、廻り之者遣シ候所、賃銀引下ケ候様被仰聞候、

十七やより内意ハ無之哉と、申來り候ニ付、何とも噂

無之趣申遣ス、尤沙汰在之候は、案内可申旨、申遣し候

一同四日、本町大和屋方へ手代藤兵衛賃銀之事、尋ニ遣

シ候得ハ、丁内ハ皆々賃銀下り申候所、未何共案内無

役人

嶋や

佐右衛門

十七や

孫兵衛

わかさや

仁右衛門

之義不念之由、被仰候得共、手前より申上候は、是迄引下ヶ、其上ニ又々下ヶ申候而ハ、何共難義之由、申上候へとも、町内一同之義、則十七や之書付、御見せ被成写取、帰り申候（11オ）

一同四日、右本町賃銀之事、大和やより被仰候ハ、大茂方と書付一所ニ差出シ候様、被仰ニ付、依之、手前手代伊助、乍相談遣シ候所、外ニ引下ヶ候は、此方共も其分ニいたし可申と被申、折柄、大伝馬丁賃銀下り申候、此義も、其許行司ニ付、中間へ廻状御出し可被下哉と申候へハ、存之外成挨拶、左様ならば、先達而引下ヶ不申候内、中間へも可及相談所、今更申候而も無益之よし、右本町義も勝手次第と被申、夫故此方斗本町店へ断申、とかく賃銀之義ハ、外之格式にて、御請合可申と申遣答（11ウ）

十一月十一日牧野越中頭様より、左之通り之御差紙

被置下候

達儀在之間、明朝可罷出者也

泉や

牧野越中守

甚兵衛

一右之趣、申来り候付、両町奉行所正書付差出シ申候  
御訴申上候

一從牧野越中守様、明朝可罷出様御差紙被置下候、其儀御断申上候

十七や印

しまや印

いつみや印

（12オ）

一十二日、牧野越中守様御役所へ、久兵衛、喜右衛門、宗助三人并大屋次郎右衛門殿、罷出候所、御役人又左衛門様御かゝりにて、去月十九日、大茂方々如此訴状差上ヶ候、此返答、来廿日迄、役所へ罷出候旨、被仰渡候斗にて罷帰り申候

(貼紙)

右之訴狀、十七屋が請取、此方が泉屋へ相渡申候

御役所様にて被仰渡候へ、此返答十七屋、嶋屋、

泉屋、三人一所ニ差上候様ニ、被仰付候、此返

答書一冊写シ、次ニ綴有之候事

一右之訴狀、十七屋孫兵衛が此方へ受取、泉屋甚兵衛方へ此方が遣申候

一大坂屋藤兵衛と申日用頭、久兵衛ニ合度由申來候、則

久兵衛委細承候所、先達大坂屋茂兵衛方へ、若サや仁

右衛門方へ、似寄物遣候、取次右藤兵衛致候由、大津

付油紙包卷持參致候而、則此一物にて御座候、茂兵衛

方未相渡ニ不申、所持仕候、此義御願可申上と存候と

て、訴狀見セ申候よし、しかし此義へ、別而此方不及

沙汰事ニ候得共、先書印置候(12ウ)

一十一月十二日、両町御奉行様へ、三人一所ニ御断申上

置候、此方ハ宗助參候、御帳面ニ御記置被遊候よし

一十三日、大茂が訴狀之義ニ付、横町川田や伝兵衛方ニ

て寄合候所、不定日にて相延引候、尤十七や、いつミや、手前三軒

後

一十七日、近江屋喜平次手弥兵衛、此方へ來候而申候へ、

此度大茂が訴狀ニ、手前事も有之由、右訴狀内見いた

したく、ミせ呉候様ニと申來候、此方が申候へ、右訴

狀若サや仁右衛門一同之訴狀にて候へへ、若仁方にて

写取候へへ、かの方にて御覽可被成候段申遣候、其分

にて帰り申候

一 (13オ)

十五日

前

一若サ屋仁右衛門義、此方へ來候而、先達而大茂が差出

候訴狀ミ申たく、ミせ呉候様こと申來候付、四人一例

之訴狀にて候へへ、不罷成とハ申かたく、訴狀本紙か

し遣候、則仁右衛門方が受取書と引かへ、遣し申候所

程なく此方へもとし申候

△十五日、升や源右衛門殿が金百兩借用

一十六日、六右衛門、五右衛門、十六日夕、無事にて帰着致候、尤半田山々此方、銀座灰吹銀三六メ勿余、持登り申候、十七朝早々相届申候

一触孫兵衛倅、髪置之由にて、赤飯差越、此祝義ニ青銅三百文遣候

(13ウ)

一泉屋甚兵衛、十七屋孫兵衛、手前三人、町御奉行様へ返答書之断、可申上相談仕、下書迄相認候へ共、十七屋々無用ニ可致申、相止メ申候

十八日

一となり鹿嶋々手紙来候ニ付、宗左衛門罷越候、則小兵衛殿得御意候所、被仰候趣ハ、罷越御頼申所、却而御出被下候事忝、扱御頼申義ハ、余之事ニても無之、内證向入用事有之、金三百両向内田六右衛門殿ニて無心申たく、此段内田へ罷越相頼具候様との御頼ニ候、此方申上候ハ、外方ならん事ニて候へハ、相心得申候、尤前方もケ様成事有之候、其刻ハ、呉服町かなや長兵衛殿證人ニて、手前事ハ右無心之あいさつ斗ニて候との事ニ候、左様なれハ、何分罷越、先御頼申上候、し

かし(14オ)此ほと、手まへニも無扱事ニ付、相頼申遣候所、此節拂底致しニて、不調との返事ニ付、外ニて工面致候訳ニて候へハ、いかゞ候哉、其程斗かたぐ馴共、先御頼申上候迎、罷帰申候

一いつミヤ甚兵衛、此度名跡ゆつり之由、則今、甚兵衛此方へも被参候、口上之趣ハ、甚兵衛義、兼而病身ニて候へハ、此度名跡相改候、万事是迄之通り可相頼との事ニ候とて、ミせ迄ミへ申候

一十九日 両町奉行江断書差出し候、明日弥 牧野様へ返答ニ罷出候旨、申上候、尤返答書之義

一一紙ニハ成かたく、此方ハ一分別差出候筈ニ候、外両家も別々之由 (14ウ)

一十九日、飛脚六右衛門義、此度半田山へ罷下り候而、登り之節、於福嶋、荷物一太出来ニ付、持上り候、此持金、如毎式両壱分受取来候、道中諸遣、江戸迄入用拂、残金式分有之、右六右衛門義、此方ニてやとい分様成もの、依之ミのちんとして、右残金式分遣申候、尤罷下り訳ハ、右ニ委細有之候

十九日、山八々半田山へ千両仕立にて、則五右衛門差下候、渡候切金苞両三分候咎ニ候

(15オ)

一廿日 牧野越中守様へ返答書差出候、尤一紙シテ三軒差上候様ニ、被仰付候へ共、銘々存寄有之ニ付、一紙ニ成かたく、依之、手前存寄之趣差出候、委細返答書之趣、別帛有之候、則又左衛門様へ差出し候、佐右衛門口上にて申上候へ、右返答書一同差上候様ニ、被仰付候へ共、銘々返答一紙差上かたき義御座ニ付、如此別ニ差出し候、相断差出候所、指テ御咎も無之、一々御覽有之被仰候へ、如此成にてハ、何ニても御裁許不用候と、申ニても無之候馴共、大坂や茂兵衛が趣にてハ、何ニても証拠有之故と存候、右銘々返答、格別変り事も無之、其上余り永ク候へハ、何分三軒一紙して、来廿三日ニ差出し候様ニと被仰付候趣にて、其日ハ罷歸り申候、尤大坂屋、其外木六、京弥、山宗、ふし五、出申候、尤大坂や并仁右衛門事ハ、廿四日伺ニ罷出候様との事にて候

尤此度返答書ハとまり申候

(15ウ)

一廿一日 山路へ上田かミ、中川へ薨、小津へ帶上り之錢別ニ遣候

一廿一日 右返答書、一紙と被仰付有之ニ付、銘々存寄相認候<sup>而</sup>、さや町八けん会所、三軒や一紙返答之趣、出来候咎にて、手前返答之次第相認候、久兵衛持参、又十七やハ、廿日夕、此方へ返答下書来候、何れ共相定り可申候半、<sup>カ</sup>いつ甚急用有之由にて、宿々呼来候付、いつ甚ハ、一けん婦り被申候、依之、此方も先歸り申候ニ候

(16オ)

一廿二日 牧野様江御差帛来候ハ

達之義、有之間、只今可相越也、尤手まへ斗差出候所十七や、いつミヤも罷出候

右差紙被下候趣ハ、先達<sup>而</sup>被渡候通、三軒之返答書一紙シテ、今日中差出候旨、又左衛門様被仰付候付、早速八軒会所、三軒や寄合色々相談有之、何分一紙にてハ、委細之義入組候ニ付、今一應御伺申たくと申事にて、則其趣相認、差出候所、何分一紙シテ差出候も

の事、其訳ハ、銘々返答格別相違之義も無之、夫共品  
変り之事有之(16ウ)候ハ、別々にも差出し可申答  
ニて候ヘ共、同返答ニて候ヘハ、余り永クヨミ候内ニ  
も、第一之事紛敷候ヘハ、是悲／＼一紙ニて、明朝早  
く差出し可申付、又左衛門様へ被仰付、夫々又々川中  
やニて、上り相談有之候

一廿三日ニ、十七屋、泉屋、三軒一紙ニ返答書差上候所  
下地之返答事も其儀ニて、御留置被成候、右之内泉屋  
口上書之内ニ、御前様之申義有之候ニ付、相直之候様  
被爲仰付候 則御役所ニて、直之差上置候、猶又明廿  
四日ニ、御伺ニ罷出候様ニ、被爲仰付候 (17オ)

一廿四日ニ、牧野越中守様へ罷出候所、明廿五日ニ、御  
評定所へ、茂兵衛訴状持参仕罷出候様ニ、被爲仰付候、  
室町名主助右衛門殿も御差紙来候

一同日ニ、京弥、木六、山宗、伏五、四人之者共より差  
上候訴状老枚、返答仕、一所ニ差上候様ニ、被仰付候、  
訴状趣ハ、大坂屋茂兵衛訴状披見仕候所、私共存念相  
違御座候、茂兵衛申上候通ニ被爲仰付、被下置候ハ

、有難と申文言ニ而候

一同日ニ、横町河内屋伝兵衛方ニて寄合仕候

一近江屋藤兵衛も罷出候様ニ、被爲仰付候由

一同日、名主殿々差紙請ニ、印形持参仕候様ニ申来候、  
則御差紙受取候 (17ウ)

一十一月廿五日ニ、御評定所へ罷出候所、御裁許被成下  
候趣

一株と申儀、後の障リニ相成候事、株ハ成不申候と被仰  
候

一大茂兵衛證文、印形取申ハ、後之頭取致工ミ也と被仰  
候

一若仁右衛門義ハ、不埒之致方、依之三ノ文過料

一十七屋、泉屋、手前ハ、何ニも御構無之候

右之外、難有事も難尽筆紙候

一廿六日夕、寄合之儀、十七屋へ相談ニ遣候所、今晚ハ  
遅ク御座候間、明朝飯後可然と申来候 (18オ)

一廿六日ニ、牧野越中守様へ御差紙来候而、三人大家、五  
人組、名主罷出候所、廿五日ニ、御礼届参候節、宗助

申上候義、少々紛敷事有之、誤り証文御取被遊候訳ハ  
一今日御慈悲之御裁許被成下、難有奉存候、猶更老本仕  
立儀、銘々差出候様ニ、被爲仰付候と断置候、此儀、  
御評定所ニ御沙汰有之候、老本仕立ハ、是迄銘々仕  
立タルテハなきかと、御尋被遊候、依而銘々相仕立差  
出候と申上候、依之、右之通断置候、然所、牧野様ニ  
而被仰付候ハ、不申付義ヲ届候事不埒候、誤り証文被  
仕と被爲仰付候、右誤り証文之文言ハ、於評定所ニ不  
申付義相届、不埒之者、自今紛敷義ヲ申問敷と之義斗、  
其外仕立(18ウ)之儀も、外之子細無之候

一同日、兩町御奉行様、今日牧野様へ被召出候而、誤り  
証文御取遊候と御断申上候、嶋長門守様被達御聞ニ候  
と御申被成候、石河土佐守様ハ早速ニ相不濟、昨日評  
定ニ而裁許相濟候所、誤り証文御取被成候義、有之間  
敷事ニ候、其子細委申上候、得と御座候ニ付、書付差  
出候、仕立ニ銘々不相成義ヲ、銘々仕候様ニ被爲仰付  
候と、申上置候、此義紛敷と御座候、右之証文御取被  
遊候と書付差上候、被達御聞ニ候と被仰候 (19オ)

一同廿七日ニ、寄合仕候、行夏之義申出候、勘定仕、

来月十日ニ、木津屋六左衛門へ相渡可申候と申候

一廿五日、御評定所御立合之御衆中様

牧野越中守様

本多紀伊守様

大岡越前守様 難有御意敷多有之

山名稻葉守様

神尾豊前守様

石河土佐守様 右同断

寫 長門守様

御大目附様御兩人

一廿五日ニ、久兵衛、宗助、兩人罷出、其外承人家内不

殘罷出候

一大茂手代平兵衛と申者、宗助、甚五郎、兩人ニ打被込、

氣味能き事無限

一山城屋弥兵衛申上候ハ、私共ハ早株ハ無御座候、私共

ハ并飛脚問屋ニて御座候と申上候、此度腰ぬけの張本  
也



一 毫本仕立之義ハ、銘々<sup>ニ</sup>是迄致来候<sup>ニ</sup>而ハ、なきかと被仰候、いか<sup>ニ</sup>も、銘々<sup>ニ</sup>致来候と申上置候、是ヲ能勘弁可致事、只今ハ不入義候、

株之義ハ、越前様之御伺ニてきへ申候

(20才)

一 此度出入、茂兵衛工ミ相知、殊之外御阿被遊候、兎角八軒一同ニ申合、是迄之通ニ被仰付候、相互ニ可相慎事ニ候、此以後、訴不仕候様ニ被仰付候

一 十二月朔日ニ、名主殿<sup>ヲ</sup>手前、十七屋孫兵衛殿、兩人呼ニ来候<sup>而</sup>、久兵衛被參候、此度出入之義ニ付、牧野様へ御証文御取被成候、此方奥印致候、依之、又々兩人<sup>ハ</sup>、此方へ証文印形取申候と、下書差出被申、則大家奥判ニ<sup>而</sup>印形致候様ニ申来候、右之下書別紙ニ写有之候

(20ウ)

一 十二月十一日ニ、大伝馬絹店衆中へ、直段下ヶ願ニ參候、書付左之通ニ候

一 半田山<sup>ハ</sup>、銀荷式太、輕尻持、飛脚利兵衛、宗兵衛、兩人、十二月十二日夕着仕候、状ハ相届申候、銀十二日ニ相届申候

一 十二月十二日、一もんしや仁兵衛殿へ、宅替之祝義、鯉式本遣候

一 十二月十日ニ、福嶋仕立之義、山八<sup>ハ</sup>申来候ニ付、五日切四兩と申遣候所、山八方ニ<sup>而</sup>、式兩ニ<sup>而</sup>請負候者有之候由申来、此方四兩<sup>ハ</sup>引ヶ不申と、申遣候所、山八<sup>ハ</sup>差遣候、依之以後ニ通違被成候ハ、此方証文引可申遣候所、如何様共、御望次第ニ可仕候と、申来候ニ付、十二日伊介遣候

(21ウ)

一 此方証文引可申、申義ハ、其元<sup>ハ</sup>直ニ被成候ハ、引可申、然上ハ、銀座へ此方<sup>ハ</sup>、直ニ御願可申上、申遣候

一 十二月十六日、伊丹屋吉右衛門殿<sup>ハ</sup>呼ニ參候、此度茂兵衛方、遠慮之義、出来仕候<sup>而</sup>、上方道中筋用事、当町荒物問屋寄合之上、相談仕、当分用事、其元へ申付候、則大茂兵衛方<sup>ハ</sup>、此之通ニ申来候と、手紙御見セ

(21才)

被成候、手紙之写左之通

一御手紙忝拜見仕候、弥御勇健ニ被遊御座、珍重ニ奉存候、然ハ拙者義、十二日〆遠慮(22才)之筋御座候而、御登セ御用受取不申候、此段早速御断可申上之処、右遠慮仕候間、一切手代共モ差遣し申義難成、依之、御左右不<sup>(誤不明)</sup>千萬氣毒ニ奉存候、御用御登セ之義ハ、外立可被遣旨、御尤至極ニ奉存候、御手支無之様ニ、被遊可下候、私方落着仕候ハ、只今迄之通、御用被仰付可被下候、落着次第、早速参以御願可申上候、偏ニ頼上奉存候、乍憚右之段、御組合様方へ、宜敷御沙汰可被下候、以上(22ウ)

あら物

大坂屋

南新堀御組

茂兵衛

御行司様

一右之通、訳々御座候ニ付、請負証文一紙ニ仕、左之通、連名ニ而差出し置候、尤触之義ハ、九兵衛遣申候、九兵衛印鑑置候

⑦萬 屋又右衛門殿

⑧方道 明久 兵衛殿

⑨舍粉川屋清右衛門殿

⑩⑪同 宗兵衛殿

⑫⑬近江屋三郎兵衛殿

⑭⑮出雲屋仁兵衛殿 半紙

⑯⑰白子屋勘兵衛殿 同

⑱⑲綿 屋儀 兵衛殿

⑳⑳加伊 坂市右衛門殿

㉑㉒同 伊兵衛殿

(23ウ)

一十二月九日ニ、近江屋藤兵衛と申日用頭

石河土佐守様へ出訴仕候由、子細ハ、先達若サ屋仁右衛門方へ持物致、藤兵衛方へ頼遣候所、仁右衛門方へ相頼遣候、依之大坂屋茂兵衛右之証據ヲ以、越中守様へ御訴申、段々御吟味之上、十一月廿五日ニ、御評定所へ仲間と仁右衛門、大茂被召出、仁右衛門三ノ文過料被仰付、首尾相済候而、仲間一同ニ申合、十二月十

日ニ、行司も受取、互ニ申分無之相勤候所、右藤兵衛、九日ニ出訴仕候(24オ)ニ付、御吟味之上、右拵物謀紙ニ相極、勘右衛門、平兵衛、十二月ニ牢者被仰付候一藤兵衛、九日ニ出候所、此義ハ、先達相濟候儀と被仰、御取上ケ無之、御差戻し被遊候由、然所、又々押而十日ニ罷出、右拵物之出所、所左衛門と申者、御召出し被遊被下候へと、御願申上候由、兎角此義ハ、先達相濟候儀、又々願ハ仁右衛門ニ被頼候哉と、御申被遊候由、全左様ニ而ハ無御座候、兎角、所左衛門ヲ御召出し、被遊御座候ハ、大茂と私三人立合、此(24ウ)一物相渡申度と、御願申上候所、左候へは、其方ニ所持仕候證據ニ可成物、不殘持參仕候様ニ被仰付、拵物書状とも差上置候由、然所、十一日ニ、御内証ニ而、御沙汰有之候様、風聞承候、翌十二日六つニ、御召被遊候、御差紙十二日亥刻斗ニ来候由、十二日明六つニ、勘右衛門、平兵衛罷出候所、勘右衛門、所左衛門有かと御尋被遊候所、イヤ所左衛門ハ無御座者と申上、左候へハ、此一品ハ拵候哉と、成程仁右衛門ヲ見届之ため仕候、見届申儀ナラハ、正真之物ヲ遣可申事、似セ物遣候(25オ)段、重々不埒ニ思召、此義、茂兵衛如何ニと、藤兵衛ニ御尋被遊候所、勘右衛門罷出、茂兵衛三年前、病氣ニ引籠罷有、不奉存候と申上候、勘右衛門罷出、何角申訳可仕と致候所、申訳ニ不及、勘右衛門、平兵衛、兩人ハ縄ヲ被仰付、猶又茂兵衛呼ニ遣セと被仰、茂兵衛義ハ病氣ニ而御座候間、御免被下候へと、御願申上候へハ、戸板ニ而も乗セ、呼寄と被仰、茂兵衛呼ニ来候、然所兩人ニ縄ヲ被仰付、御登城被遊候、夫迄相待候様、遊被仰付候由、是迄之向々、御阿被遊候ハ(25ウ)先達而其方ハ、若仁右衛門儀、御裁許相背候と申上候、仁右衛門ハ御裁許相守、其方儀之御裁許不用と申物、其故ハ、仁右衛門商賣取上候義ハ、能存知罷在所、乍存知、ナセ遣候哉、是則御裁許やふりと申物と、急度御阿被遊候由、是等ハ前代未聞之御とかめ、尤至極御言葉と奉存候事

一右之兩人爲見舞、桶ニ食ヲ入、にめし一桶と、十二月

十七日ニ、籠家へ遣候所、右桶ハ御戻し被成、則八軒会所宝物ニ致置候、後ノ人氣ヲ付、時々右桶ヲ（26才）吟味可致者也

一大茂兵衛商賣御差留ニ付、十二月十四日ニ、酒店行司へ、此方義ハ、別条無御座候候、御用是迄之通ニ、無御心置被仰付被下候へと、願ニ参候、此節兩人参り申候

御行司

差 塔善右衛門様

川 井与次兵衛様

塚口屋五郎左衛門様

丸 屋嘉兵衛様

（26ウ）

十二月十八日ニ、銀座ハ福嶋半田山へ、仕立金千五百兩出候所、福嶋左次郎、宗兵衛居合、相談仕候所、金百兩ニ付、四百文づゝニ而参可申候と申付、差下し申候、尤金高無数之節ハ、仕立金之内ヲ了簡致候筈ニ御座候、兎角、金高ニ応し、時々相对可致者也、外ニ荷物出金在之也、外ニ遣申候

翻刻、「寛保元・二年 手板組中日記」（藤村）

一大茂方出入之義ニ付、此間中より、中間七間より御訴詔と出申候様、寄合在之、中間之（27才）内より被申候は、勘右衛門、平兵衛、御赦免之願申候様ニと被申候、此方申入候は、夫は先答違と被存候、大切成義ニ御座候へハ、右兩人之者之願ハ、追而之義、先茂兵衛方商賣之筋一通り御願、其上候義、茂兵衛多めニ宜、其上ニて之相談も可有事と申入候、此義も、不改無何角ニ御慈悲之一通斗、御願申上候所、土佐守様御意ニハ、兩人之者義、未吟味在之者、不及願と被仰候、其分ニて銘々帰り申候

西十二月廿三日

（27ウ）

一 十二月廿二日暮方より、天氣惡敷候而、同十五日出之飛脚今夕迄着不仕候、右前日、大和や善右衛門様、中川仁兵衛様、阿わや山路様、同人つれて参り、今夕迄着無之候

西十二月廿四日夕

一大坂表、廿二日出、廿四日出、早大井川満水ニ付、江戸表へ同廿九日辰ノ着、殊外致同乱し、其夜四ツ時、

芝西應寺まへへ出火、少々斗やけ申候

酉ノ十二月廿九日

(28オ)

一 戌ノ正月四日、さゝや弥右衛門殿、村上源右衛門殿、其外寄金とも四千余在之、飛脚与次兵衛、忝太乘にて爲登申候

一 戌正月六日、初番所々新得意御座候而、用事多ク、併旧冬酒店中酒不残風味代り、依之爲登無数之由被仰候、惣高六萬五百両登り申候

一 旧冬へ錢下直ニ付、得意方賃金も下り申候故、見世之仕出し立替り、則諸用帳在之候、六日番より (28ウ)

一 戌ノ正月六日初番、一番三太乘、宗兵衛翌明方ニ出シ、式番六右衛門五駄乗五ツ半時出シ、三番甚兵衛式太乘内浜松式固在之、四ツ半時出シ

一 正月十日、酒店参会、茅場町伊勢屋多兵衛殿方にて、例之通、せいろう遣し、兩人御見舞申上候所、大行司中橋樋口屋徳兵衛殿、山本甚兵衛殿、御兩人御挨拶にて被仰候は、旧冬へ、段々錢下直ニ成り申候間、飛脚爲賃銀如何程にて、下引候様ニと被仰、尤此方へ如

何程と申差図ハ不致候間、相談被成候而、如何様とも引下ヶ候様との御事候、手まへへ申上候ハ、成程承知仕候、併右賃金之(29オ)義ハ、唯今拾三匁にて相務申上候ハ、まへ之直段にて御座候、先達而錢高直之砌、拾五匁御願申上候所、此義何れとも訳御立不被下、やはり本之拾三匁にて相務申上候、然ル時ニハ、其節御願申上候直段之義、御取上ヶ無之候様、奉存候馴共、御用承折柄、如何様ニ被仰候而、御辞退は不申上候、殊ニ金銀之義ハ、荷物とハ餘慶も在之、此御影ヲ以、大勢物当日すこし罷在之、何分各様方へ、如何様とも被仰付被下候様ニも申上候、前々其分にて御座候、此義達而と被仰候義ニても無之、右錢下直故、一通り被仰候、殊ニハ大茂方たゝ今之品にて御座候様、達而も被仰、此方ニも右之義も申立ニいたし置候 (29ウ)

一 右参会之義ニ付、其分ニも難成、組々行司方廻り乍御窺、当十八日当り参上、工面ニいたし置申候所、昨十六日、呉服町福山清兵衛殿御出、被仰候ハ、酒店賃金之義ハ、先一日延成候義、其許之御勝手被申ものにて、

押而引下ヶ候様との義も無之、先錢下直候へハ、上方支配人方<sup>ヲ</sup>さつも<sup>ウ</sup>も在之候へハ、後日之ためニとの御事馴共、達而と申訳ケも無之、殊ニ唯今大茂方ニもあの仕合、ヶ様成義申立被成候間、又々改、中間中へ御廻りニも、およひ申さすとの御事、其分ニいたし候一戌ノ正月十六日、八間や寄合在之、此趣ハ大茂方下り支配之義、江源組合<sup>ヲ</sup>七間行司、京や(30才)方へ申候り候へ、御組合へ御頼申上度御座候間、八間やへ参り候哉、但シ御銘々へ相廻り可申哉と申義、右京やへ申参り候、依之之寄合、此趣ハ大茂方上下とも支配に山城や方ニて相務申候、然ル所、江源組合<sup>ヲ</sup>被申、其登り之義ハ格別、下り之支配、我々共居合申候得ハ、手前ニていたし申度候、此義、山し路や并残り六間や<sup>ヲ</sup>、とも<sup>ニ</sup>挨拶くれ候様との訳ニて、則今日伏九兵衛殿、手前へ見へ被申、右之趣咄被申候故、何れ尤成と存、併支配之所へ、山城やへ被致候へハ、外々へ御申ニもおよひ不申候、山城や方と御相談可然と申入候、此義も其分ニて候、然ル所、八間や会所より宗助帰り

被申、様子相尋申候へハ、(30才)噺銘々取々ニて候、其内ニも被申候へ、いまた支配之所ニ<sup>ニ</sup>而ハ無之、大茂方之義、訳否難知候ニ、夫所ニてハ無之と被申候、殊ニハ、山城や方ニハ先達而御公儀<sup>ヲ</sup>被仰渡候而、支配いたし候へハ、大茂方之落着不仕候内、支配させ申事難成候よし申候、此義ハ何共難心得事ニ候、何れとも訳立不申候、其分ニて帰り申候

戌ノ正月十六日

一 正月廿一日、大坂江源組合より、昨日八間や行司、京や方迄手紙参り、左之通之願申上度よし、案内被致、則八間や方ニて寄合申候、(31才)廿二日御願申上候由ニて御座候、下書左写

乍恐書附ヲ以奉御覧申上候

御当地何町誰レ店附所罷在候

大坂飛脚商売者共申上候

一 私共儀、先規より三度飛脚商売仕、所々御屋鋪方御用請負上下仕候ニ付、御当地萬町茂兵衛方宿ニ仕候所、

右茂兵衛義、蒙御咎罷在候ニ付、外宿相極候内、北さ

や丁同商売宗左衛門と申者、当分相頼、支配仕候、然

ル所ニ、惣左衛門方ニも同前之義、飛脚（31ウ）相着

申候ニ付、両方之要用混乱仕所ニ、御屋鋪方御大切成

ル御要数多御座候所、萬一間違出来仕候<sup>而</sup>ハ、私共難

儀仕候、依之、私共飛脚之義、右外店ヲ借り、引請取

扱仕度奉存候ニ付、御窺奉申上候、已上

戊ノ正月廿一日写

（32オ）

覚

一金吹町

京 屋弥兵衛

瀬戸物町

嶋 屋佐右衛門

室町貳丁目

十七屋孫 兵衛

両替町

山田屋八左衛門

彦兵衛店

次郎兵衛

源 兵衛

右相尋義、有之候間、明廿五日五ツ時ニ、（32ウ）樽

屋所へ可参候、以上

町年寄

三人

戊正月廿四日

此配符早々相廻し、留り<sup>も</sup>可被送候

名主月行事

（33オ）

一右日用頭、廿五日五ツ時ニ、町年寄三人、樽屋様へ八

軒行司者共罷出候、願人申上候<sup>ハ</sup>、先年<sup>も</sup>次飛脚敷来

り候、其後中た<sup>ハ</sup>、八軒屋飛脚方へ合せ候<sup>処</sup>、次第ニ

賃銀高直ニ申合、我々共売買ニ合申候ニ付、銘々日用

頭<sup>も</sup>、次飛脚屋へ申度願申上候、樽屋様被仰候<sup>ハ</sup>、是

ニハ何様之訳可有之由、先年出し候儀ニ<sup>而</sup>候得<sup>ハ</sup>、御

願ニハ不及申候、併八軒之者共ニハ、売買<sup>躰</sup>之差<sup>而</sup>構

不申候義ニ候哉、又ハ相構候義ニ候哉と、御尋被成候、

八軒之者共申候<sup>ハ</sup>、日用頭と申も、手前共得意同前ニ

御座候、銘々自分ニ出し候<sup>而</sup>ハ、夫程得意無跡候、乍

去売買之儀ニ<sup>而</sup>候得<sup>ハ</sup>、我々共差留申義<sup>ハ</sup>（33ウ）不

仕候、御上之被仰付次第ニ<sup>而</sup>御座候、樽屋様被仰候<sup>ハ</sup>、

左様可有筈之様ニ被仰候、併直段高直ニ無之様ニ引下

ケ、相互ニ取引可仕候旨、御申被成候、是迄之直段ニ  
引下ケ候<sup>而</sup>ハ合不申候、差<sup>而</sup>銘々差出し候<sup>而</sup>も、大キ  
構ニもなり不申候段申上候、先今日ハ取込罷<sup>レ</sup>歸り、追  
而又々相尋可申候由、皆々一同ニ歸り、八軒会所ニ而  
寄合申候、追而直段書付差出し候様ニ被仰付候、願人  
も百「五十」<sup>(加)</sup>軒之余も御座候旨申上候、是我も不殘御  
尋可被成候筈ニ御座候、あらまし如此ニ候

正月廿五日

(34オ)

一二月九日茶店参会之上、直段御定被成候間、二月十六

日ニ被仰付候

上金拾貳匁

行司

有合拾壹匁

長崎六郎次様

小道七分

西村喜三郎様

八分

小澤喜兵衛様

銀八匁

小澤六兵衛様

荷物七匁貳分

丸井甚四郎様

相可いさわ<sup>(2)</sup>

徳刀久兵衛様

八分まし

(34ウ)

覚

一石川土佐守様、今日五つ時ニ、大坂屋茂兵衛并手代  
共不殘、近江屋藤兵衛、七軒会所不殘、名主大家相添、  
御差紙ニて罷出候、殿様被爲仰付候ハ、茂兵衛呼出候  
伯父勘右衛門、手代平兵衛、右兩人ハ、先達若狭屋仁  
右衛門商売御上へ被爲召上候、又々商売を致し候哉、  
其品見顯出候爲ニ、木切竹切を以替名謀書指、右仁右  
衛門過ニ落し候爲ニ工ミ訴人相顯、伯父勘右衛門義<sup>(ハカ)</sup>  
籠死致ニ付、家内被爲召上候、手代平兵衛義ハ、江戸  
町々引廻シ於品川こくもんニ被仰付候、又茂兵衛事ハ、  
三年已前病氣と申上、何も商賣構不申不存候と申上  
候得共、其品不相立候、依之飛脚商賣被爲召上候、近  
江屋藤兵衛何も御尋無之、右御前へ罷出候者一同ニ、  
昼過ニ罷歸り申候

(35オ)

一右手代平兵衛、町々御引廻、其外木引町ふり仁助と申  
通り者、年頃七十余、男傭人同前之とか人之様成もの、  
右兩人一所ニ引廻シ、寄力式人高札二枚、乃ぼり式本、



見物日本橋辺へ参り候時、数万人無限り、本町通引廻シ、追付籠之前入やいなや、品川へ持下し、こくもんニなり、日もあてられぬ次第也、右仁助同類、石川様へ三人、内老入ハ江戸ハかまい、二人は遠道被仰付候、此者之親、女房、子共、晦乞なきのなみた、あわれはかなき次第なり

戊二月十八日

(35ウ)

一江源組合、当所ニ店出し申度趣、御窺申上候所、何町誰と申儀、名目を附、相願候様ニと被爲仰附、依之、出店之儀、致詰餘居申様ニ相見へ候、如何致相談候哉、山田屋ハ左衛門と取組、大坂下り飛脚、戊正月廿五日出、二月三日着々、山ハニ而支配致候、上飛脚、二月九日出々、山ハ、山宗、手前、三組、則江源飛脚平三郎、山城や市右衛門、手前与次兵衛也、柳屋出、早二月十五日出々、格番ニ山ハへ附参候

一江源組合、酉十二月居合、天治、夫々段々伏九、亀小、腕五、長理、江源も、正月廿九日立ニ而下り被申候、夫々大茂徳意方へ、段々願ニ廻り、干かや三十八

軒行司被仰渡、二月十六日番々、山八方ニ而相勤申候、右之内、手前徳意も在之候へ共、一同ニ通イ入申由、江源断ニ見へ候、酒店當時当番町中橋へ、数度願ニ出候所、大坂組合と申事(36オ)存居候へ共、是迄当地ニ而、近付ニても無之、山田やハ左衛門と申も、不存候など、御挨拶在之旨、依之願書差出し申趣

乍憚口上書を以御願申上候

一私共組合拾老人、代々飛脚商賈致来、名々様御用要被仰付被下、大勢之者共渡世仕、忝仕合奉存候、然ル所年来之取組大坂屋茂兵衛儀、當時若年者、殊ニ病身ニ御座候ニ付、諸事表向相構不申、則茂兵衛母弟勘右衛門と申者、後見仕罷在候ニ付、私共前々之商賈仕法等、親茂兵衛が相定置候義ニ、格別相違仕、勝手ヶ間敷義斗仕候故、近年内證ニ而ハ、組合之我々共も、色々と心遣仕罷在候所ニ、(36ウ)此度御上り蒙御咎メ、右勘右衛門并手代平兵衛入籠仕罷在候、然共、右申上候通、茂兵衛義ハ、年来馴染之者、殊ニ諸事不存義ニ御座候得ハ、何卒蒙御赦免候ハ、各々様へ御願申上

々、先規之通り取組、商賣相續仕度奉存候ニ付、当分山城屋宗左衛門方相願、支配仕罷在候所、組合之者共追々罷下り、此度御咎メ之品承合候所々、不宜取沙汰仕候故、千万氣之毒存、此上見合延引仕候而ハ、無難之私共迄、茂兵衛一駄之様ニ思召被下候而ハ、難渋至極仕候、依之、登り飛脚相立申度奉仕存候ニ付、御当地御番所様立御窺申上、此度本兩替町(37才)山田

急度埒明、御出方様へ、少茂御苦勞掛申上間敷候、此度御中間様御用被仰<sup>(虫損)</sup>不<sup>(虫損)</sup>被下候而ハ、我々商賣相續難相成候、左候得は、我々共組中者不及申上、道中筋所々取組之者并下働之者迄、大勢難義仕候義被思召分、各々様へ御披露被遊、御憐愍之上、右御願申上候通り、此後爲御登御用要、山田や八左衛門方へ被仰付被下候様ニ、(38才)幾重ニも御願奉申上候、以上

大坂会所元

寛保貳年

江戸屋源右衛門印

壬戌二月

組合

り、商賣相續仕候、数年来、御用要被仰下、是迄無恙相動来候私共組合之義ニ御座候得共、何卒前々之通り御用被仰付被下置候様ニ奉願上候、勿論右々ハ、諸事

伏見や彦右衛門印

茂兵衛方へ相まかせ、組中之者相廻り不申上候段、重々無調法可申上様無御座候、此以後相改、組合拾老人

森田や左兵衛

之内、御当地ニ相誥、定日々ニ廻り之者ニ老人宛相添随分入念、縦御状御調遅ク候共、何々度も取ニ指上、

長崎や理右衛門

少茂御差支無御座候様ニ相動可申上候、(37才)就中

江戶屋源兵衛印

爲御登御用之品、於道中紛失滞之義、出来仕候ハ、早速届々先立御案内仕、御差図次第、我々共方へ引請、

いせや庄右衛門  
天まや治右衛門印

龜 屋善左衛門印

(38ウ) 小松屋佐左衛門

酒屋 山田や次右衛門

御行司衆中様 江戸本兩替町

山田や八左衛門

如此願書、中橋御行司へ差出候、何卒急々御参会被遊被下候様ニ、願申候へ共、是斗ニ御参会被成候義、難成候由、追増参会之節、御披露可被成との義、右願書町々行司へも出し申様ニと、御申被出候由、手前も願書相認、四組御行司へ差出候

乍憚書付を以御願申上候

一御仲間様御爲登御用之儀、大坂屋茂兵衛、私、兩人江被仰付被下、数年相動来候所、茂兵衛去冬御咎を受候以来、私方斗江御用被仰付被下候儀、難有奉存、早速御礼(39オ)罷出候筈之御儀ニ御座候へ共、茂兵衛難決ニ逢候時節、私大悦仕候段、御礼ニ罷出候儀、何と(掛書)や思召も憚奉存差□、御礼延引被成候、然ルニ、此度外御爲登御用御願申上候様ニ及承候、茂兵衛以前之

通、商賈相統得意御用被仰付候儀は、不及是非奉存候、

外へ被仰付、被下候儀ハ、外聞実儀迷惑至極仕候、数

年御出入、乍憚御馴染之私共儀ニ御座候間、不相替御

用被仰付被下候様ニ、幾重ニも奉願上候、以上

戊二月 手板組中

酒屋 嶋屋左右衛門

御衆中様 (39ウ)

右之趣、一軒〳〵御礼乍御願廻り申候、酒店御支配人不残、其外新德意不残、步行申候

此時中橋御行司高嶋新七様 廿一日高嶋喜三郎様

岸田や仁兵衛様 (鏡不明) 山本や

呉服町丸や嘉兵衛様 かやは町組新町□田や庄二郎様

瀬戸物丁組山崎や又兵衛様

御支配人瀬戸物町組中川仁兵衛様

三州支配人大方御上り御留主 (40オ)

大坂の戊三月廿一日出ニ、当地三軒江状到来写

一筆致啓上候、追暖氣趣候、弥以其御地御勝倍御堅

勝可被成御座、目出度御儀奉存候、当地無異儀、御同

前罷在候、御心安思召可被下候

一 惣躰、旧蟬の道中筋馬込、其上川々満水旁ニ而、飛脚殊外延着候付、所々得意方<sup>（由緒）</sup>御不審之儀、毎年之御事ニ候、尤冬年之所ハ、短日之申分<sup>（来カ）</sup>々も御座候而、其品申立、是迄御了簡も御座候所、併当春<sup>（由緒）</sup>唯今ニ至り、飛脚別<sup>（由緒）</sup>延引仕候、最早長日ニも相成付、々様遅滞仕候義、何共不都合成義と、是以御咎被成候、此義迎も（40ウ）右之御断申上候得共、是迄ニ具延引ニ相成候、此上段々

御大名様方御参勤御交代粗多御座候、然時立猶以馬込及延引可申候、尤川支之時節は、申分等も御座候へ共、晴天杯ニ至り、過分ニ遅滞仕候<sup>（由緒）</sup>而ハ、何方之得意方へも銘々申分難立候、夫故、当所四会所寄合仕候へ、其元状之分、別ニ走り御仕立被成可被下候、尤先状御立被成候へハ、早々差構ニも相成候様ニも、可被思召候へ共、左之通ニ御極被成、御仕立可被下候

一早走り之儀ハ、是迄之通、早ク着仕候様ニ、御仕立可被下候、先状之義ハ、先馬込之内、当所<sup>（由緒）</sup>廿七日着之積

翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」（藤村）

り、尤此方（41オ）屈方ハ、八日目ニ何方へも相届申候、然時ハ、早之構ニ<sup>（由緒）</sup>相成申間敷候様ニ被存候、右之上面被成候へハ、飛脚も往<sup>（来カ）</sup>過分ニ遣方入申間敷候様ニ奉存候、何分右之積リニ而、来ル廿八日番<sup>（由緒）</sup>、先状右之趣ニ、其元御仕立被成可被下候、無左候てハ、得意方へ此上申分<sup>（由緒）</sup>々々難成候、依之、当所四会所寄合、乍早速以書状申上候、猶此上思召之義御座候ハ、追々御互ニ書状にて、得意御意可申上候、恐惶謹言

三月廿一日

江戸や

惣五郎

津国や

十右衛門

和泉や甚兵衛様

天まや

山城や宗左衛門様

弥左衛門（41ウ）

嶋や左右衛門様

尚々先状之義ヲ以、当分馬支之内、御仕立御尤ニ奉存候

一 届々方之義ハ、右得御意候通、或ハ其元、廿六日出ニ

御仕立被成候へハ、翌廿七日を当所届ヶ方、八日目ニ

て御座候、縦会早ク着仕候而も、手前ニ指扣、八日目

ニ相届ヶ中候工面ニ堅ク申合置候、以上

右之状三月廿六日着ニ而、山城や方へ廻し申候

(内側白紙)

(裏表紙)

(表紙)

壬寛保式年

日用 留 第二

戌三月吉日

(表紙ウ)

戌四月朔日亥壬四月迄

(1才)

手板組中

控

一 毎日入用之儀并商賣筋之儀ニ付、末々迄も用立候儀は、  
居合之内心付候而、此日記<sub>五</sub>留置可申事 (1ウ)

(白紙)

(2才)

一 三月十八日出ニ、大坂を当地、泉甚、山宗、手前三軒  
江運状来候趣、日用一番之扣ニ在之候

一 三月廿六、廿七日両度、当地寄合御座候、廿六日ハ三  
軒、廿七日ハ七軒寄合之上、大坂を申来候先状之義、

江戸の七日物ト仕候而、差登せ候積、繼所へも申遣候  
筈候由、行司山宗

七日物、仲間ハ卷ノ奴付八百文かへ

封狀一通ニ付

大狀見合

日用方七日物、卷ノ奴老貫四百文かへ

右四月朔日ハ始メ申筈

(2ウ)

一酒店問屋衆中御行司方、於大工町御寄合、三月晦日ニ  
在之付、願書差出度旨、町内上嶋などへ内意申達候処、  
下書加筆等も被成被下候、然所、近辺四五人も、鹿嶋  
御寄被成候付、是ニ内意申、下書見と申処、又候加  
筆ニ而、左之通差出し申候、則  
大行司中橋ニ而首尾能キ思召ニ而納、追而沙汰可在之旨被  
仰候

乍憚口上書ヲ以御願申上候

一御仲間中様御登せ御用向、無御残私共方ニ被爲仰付被  
下候而、忝仕合奉存候、前以申上候通、御取立(3オ)  
御出入之私共儀ニ御座候へハ、外実疎ニ不奉存、猶以

翻刻、「寛保元・二年 手板組中日記」(藤村)

御用等御大切ニ相勤、遲滞無之候様ニ可仕候、弥不相  
替、御一同ニ被爲仰付可被下候、然は、例年御参会御  
座候節、御勝手迄相詰罷在候へ共、御行司様御差図を  
以、退参仕候へ共、御出入之私共儀ニ御座候間、何卒  
向後御勝手ニ相詰、外御役人衆中同前ニ相勤候様ニ、  
被爲仰付、被下候ハ、末々ニ至候而も、外聞旁以忝  
仕合奉存候

右御願申上候通、宜御取成被遊下候而、願之通被爲仰付  
被下候ハ、忝奉存候、以上

(3ウ)

寛保貳年

戊三月晦日

大坂相勤罷在候

嶋 屋左右衛門  
同 伊兵衛  
同 五郎兵衛  
同 十兵衛

大坂相勤罷在候

き国や九郎兵衛  
嶋 や新右衛門  
同断 かゝや五郎右衛門

同 文右衛門

大坂相勤罷在候 大和や善右衛門

同 利 助

大坂相勤罷在候 河内 喜右衛門

酒店御当番

御行司様

(4才)

口上

道中川支并馬支及数度、何方之飛脚も同前ニ而、御用向延着仕候段、先達而御尋被下候付、飛脚之者江も急度申遣候處、先月廿九日出飛脚当三日ニ、駿州吉原宿申越候ハ、富川支ニ而、登り御荷物五六百駄余も差支有之、難儀仕候由、惣飛中申来候、依之各様御状之儀ハ少々成共、早ク相届申様工面仕候、先延着可仕御断申上度、如斯御座候、以上

戊四月六日

嶋屋左衛門印

手板組中 (4ウ)

酒店御行司様

乍憚御町内順々御廻し可被下候様ニ奉願上候、以上

(5才)

一四月九日ニ、中橋下地行司岸田屋仁兵衛様へ参候而相頼候、然所、行司高嶋新七様、岸田屋次郎兵衛様江渡候由被仰付、此両家へ頼上帰候

一同十日、大参会坂本町いせや方ニ而在之候付、右書付候趣ニ而勝手江相詰罷在候、大行司ハ則瀬戸物町故、御取持被成被下候へ共、願之趣、新法之事故無用之由、御相談出来候内意承候へハ、手板組之義ハ、大切之用事も相頼候方々江改人同格ニ而、勝手向取持とハ難申事、先々新法之事無用との事ニて、当日埒明不申候、則此趣行司町 (5ウ) 之内、西宮仁兵衛様被仰渡候、別而内証共御世話ニ被成被下候由及承候、扱又、蒸籠之義も前々老荷御見廻として被下候處、此義も此度相改、式荷御出し被成候事披露仕候へハ、是以新法之義、老荷ハ御返進申様ニとの事ニ候へ共、此義ハ、行司方町内故、何共不存受納仕候、是ハ行司之無念ニ而候、自今之義ハ、前々之通、老荷ニ被成候而可然候、

此段可申様との事ニ候

担、内証承候へハ、江戸や源右衛門も、御見廻として、蒸籠老荷差出候処、行司方も被仰候ハ、此度（6才）御見廻として被下候へ共、何れも用事御頼申ニ而、無御座候へハ、受納も成かたく候ニ付、返進仕候とて、御返し被成候、其後、源右衛門、京屋佐兵衛（二）兩人来候而、則願書持参仕候、其趣ハ、私共下り用向ハ沢山ニ而罷下候へ共、登り之義、右之仕合ニ付、難仕候間、何分奉願上候と申、願書出候付、書付之義ハ、披露可仕と被仰候而、御留置被成候由、菟角、行司共も何れもへ、用事被仰付候へと申事ハ難申達候、諸事多御座候御方様ニハ、可申付と思召候方御座候ハ、其段ハ勝手次第と被仰候由ニ而御帰し被成候由、扱又（6才）手前も蒸籠式荷出候事も、新法ニ御座候間、老荷ハ返進可然候、江戸や源右衛門も持参候物ニ而候ハ、受納被成置候而も可然事、御返し候ハ、手板も来候も、老荷ハ返進可然候、併此

翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」（藤村）

義ハ源右衛門ニハ由縁無之事、鳴や左衛門一荷、

手板組一荷として来候へハ、是ニハ由縁之在之事ニ候故、留置候と申事ニ而相済申由、先此度之願ハ、早速ニハ相済かたく、重而願申事可然と被仰候、内証物語共ニ候、先達而右川支（馬之）□支之義（7才）書付出候事も、茶番評定ニ而首尾極上ニ候、自今とても右之様成品触事在之候ハ、早速相知申様ニとの事

一右大参会之砌、賃銀此方も下ケ可申段、申出へきと、内証町内御衆へ物語被成候而被下候様ニ鹿嶋頼候へハ、其段、評定御座候上、被仰候ハ、先々手前も引下ケ可申と申事ハ、不入物と御座候付、相止候

一十一日ニ、呉服町津国屋徳兵衛様客伊藤久兵衛様へ御着、祝義として大平目（二）へ遣候、手紙上書ニ（7才）津国や、伊藤、兩名ニ而遣候処、兩名返事にて納候一十一日ニ、立木白子や昨日之礼罷越候、今日も次行司川口、藤田、是へも猶又願置候



一卯月十六日、今夕三州御支配具服町津国や徳兵衛殿方御座被成候、伊藤久兵衛殿用事申出候

酒店参会之砌、江源組が願出申書付、かし満七右衛門殿が見せ被下候写

(8オ)

乍憚口上書を以御願申上候

一先達<sup>而</sup>委細口上書を以御願奉<sup>上</sup>候、処々御参会之節、

御披露被成下候段、別<sup>而</sup>忝仕合奉存候、其後度々参上

仕御願奉<sup>上</sup>候得共、未御用要被仰付不被下、難儀至

極奉存候、今日御参会被遊候儀承知仕、乍憚推参仕御

願奉<sup>上</sup>候、此度御仲間中様御用被仰付不被下候<sup>而</sup>は、

(8ウ)我々商売相統難相成候、左候得は、私共組合

は不及申上ルニ、道中筋所々取組之者<sup>并</sup>下働之者共迄、

大勢難儀仕候、勿論先手我々組合請負連判証文差上置、

数年来御用要無悉相勤来り候私共組合之儀ニ御座候へ

は、此度大坂組合拾老人<sup>并</sup>ニ山田や八左衛門連判請負

証文相改(9オ)指上ヶ可申ル迄無御座候へ共、随分

御大切ニ入念相勤可申候

右之趣被爲聞召訳御憐愍之上、御願申上候通、御承引被成下、右八左衛門方へ御用要被爲仰付被下候様、幾重ニも御願奉<sup>上</sup>候以上

寛保貳年壬戌

大坂会所元

四月

江戸屋源右衛門印

(9ウ)

同組合

森田や左兵衛印

亀屋小左衛門印

江戸屋源兵衛印

亀屋善左衛門印

津国や惣左衛門印

江戸本両かへ町

山田や八左衛門印

御行司衆中様

(10オ)

右四月十日、坂本町いせ方ニ<sup>而</sup>相願申候

一四月十三日夕、大黒屋藤右衛門様へ金貳百足遣候、是

ハ出家取立被成候由ニて、方々御頼被成候付、奉加ニ

付遣候

一酒店<sup>立</sup>願書差出候写、左之通遣候、大行司<sup>溜りや四郎</sup>  
兵様<sup>立</sup> 四月十八日ニ遣候  
様

乍憚書付を以御願上候

一先達而書付を以御願申上候通、御参会之砌ハ御勝手ニ  
(10ウ)相詰メ申度趣、御願申上候処、委細御当番様  
ハ被爲仰付、奉承知候、此義乍憚御大切之御用向、被  
爲仰付被下候私共義ニ御座候ヘハ、右御参会之節、若  
御用等可有御座御事ニ御座候ヘハ、御勝手ニ相詰不罷  
在候而ハ、不都合之儀共奉存候、何卒御願申上候通ニ、  
被仰御付被下候ハ、組合不及申、外実旁別而忝仕合  
奉存候、依之憚ヲも不願、又々御願申上候

一爲御登賃銀之義、是又被爲仰付奉長候、此義少々下直  
ニ而相勤可申上段、先達而ハ申上度奉存(11オ)候ヘ共、  
少々意味合之儀奉存候而、御参会之節も差扣不申上候  
所、此度賃銀引下ヶ候様ニと、直段之儀も被爲 仰付、  
早速違背不仕、御請可申上答ニ御座候ヘ共、餘程相遣  
仕候、尤道中筋錢下直ニハ罷成候ヘ共、御当地相場程

翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」(藤村)

ニハ無御座候、惣而届方脇々所々方角ニハ、御存知不  
被遊候、諸雜用掛り物多在之、乍憚思召之外成義共御  
座候付、御願申上度奉存候、外々御得意様方ハ、直  
段之義尅々引下ヶ候様ニ被爲 仰付候ヘ共、是又(11  
ウ)右諸掛り物之訳ニ而御願申上置候、何分御了簡被  
成下候は、忝奉存候、此度違背仕候答ハ無御座、私共  
御座候ヘ共、乍憚御願奉申上候、此段被爲 思召分ヶ、  
御当番様ハ宜布御披露被成下、右両用願之通、被爲  
仰付被下候ハ、忝仕合奉存候、以上

戊四月

嶋や左右衛門

酒問屋

手板組中

御当番御行司様

(12オ)

一当廿日、深川いせ屋源七と申茶屋ニ而、大坂屋茂兵衛  
殿方ハ被申入、二重五葉饗応在之候、仲間六軒、手前  
ハ惣助遣候、混乱已来礼旁之由  
一甚左衛門町木綿屋平兵衛様無尽被相頼、鹿嶋ハ世話無

扱、金老兩かけ講ニ入申候、廿一日兩國茶やニ而初参  
会在之候、人数卅式三人

一三月廿八日出早便ニ、伊丹酒店衆々江戸伊丹店中へ連  
状到来候へ、江戸や源右衛門数度願申候付、伊丹行司  
油や庫太郎殿、上嶋八三郎殿を状来、則江戸店上嶋殿  
へ(12ウ)遣候所、鹿嶋勘兵衛殿伊丹店行司ニ付、是  
を相廻り申候由、尤左之通ニ而候

五月十日ニ

一酒店増参会、於坂本町在之候付、先夜行司方中橋山本  
甚兵衛様鴻池久兵衛様、喜三郎様堀屋茂左衛門様、道明徳左衛門様、高嶋  
町上嶋宗兵衛様此旁々様へ相廻り、先達而書付を以申上  
候趣共、明日宜奉願上候との旨申廻り候、則町内茶番  
ニ而内意承候処、御見廻し蒸籠無用との事候

一十日晚、当町茶番ニ而被仰付候、酒店金百両ニ付十一  
匁ニ相定候、其外へ下地之通ニ而候、只今相場四貫百  
五拾文位仕候ニ付右之通ニ成候 (13オ)

甚兵衛様跡也

一十一日、呉服町丸屋庄兵衛様へ、伊丹本家を手代市郎  
兵衛様御下りニ付、肴兩種御見廻ニ遣候

一同夕、中橋呉服町かやは町新川行司方直段定預御苦  
勞候段礼ニ廻り候、并住吉講行司坂本町かもや源介殿  
正断之書付遣置候、則左之通相認候

口上書を以申上候

御仲間様御用向、不相替被爲 仰付被下候而、外夷旁  
以忝仕合奉存候、然へ、昨日御酒店御参会御座候而、爲  
御登金子賃銀之義、引下ケ候様被爲 仰付、依之(13  
ウ)自今金百両ニ付、賃銀拾老匁ニ仕候様被爲 仰付、  
奉畏御請申上候、御講中様御用之御儀、御伺様ニ被爲  
仰付被下候様、御断申上度、乍憚口上書を以奉申上  
候、弥不相替幾久御出入仕候様ニ奉願上候、以上

戊五月十一日

嶋や佐右衛門

手板組中

住吉講御衆中様

御行司様

(14オ)

一十一日、小あミ町西宮仁兵衛様へも、御礼ニ罷越候、  
此度当町御行司之内、別而年寄分之由ニ付参候

一十一日ニ、江戸七軒行司いつミヤ、江戸や源右衛門方へ、返状登り候趣へ、御状被下致拝見、登り早物届方之義、被御遣候得とも、今以相談事ニ取込、何共御挨拶難及候と申返状ニ候

一十三日、西宮仁兵衛殿へ看進物遣候、此度礼旁并伝馬町松坂や久兵衛殿、本町小森次郎兵衛殿、普請出来進物遣候

一十三日、仲間寄合、道中継所之義、所々証文取候、下書ハ左之通 (14ウ)

証文之事

一東海道仕立継飛脚之義、<sup>(貼紙)</sup>「今度七」軒御会所より御仕立継飛脚御出し被成候付、私共請負申所実正ニ御座候、然上へ、何方成共御差図之所迄、御渡し被置候、合印之道踏、御定之通無滞相動メ可申候

(貼紙)

「其地七軒今度除キ」

(貼紙)

一御公儀様御法度之義ハ、<sup>(貼紙)</sup>「不及申」、京大坂御城内御用并御大名様方、其方御武家様方、御用御状箱之儀ニ御座候得は、持飛脚之者随分促成者ヲ (15オ) 吟味仕相

勤可申候

(貼紙)

「急度相守可申候、尤持送り之儀へ、京大坂加筆仕候」

一其時ニ差被出候送り手板付札之所<sup>ニ</sup>、請取渡し刻限、銘々相印差送可申候、跡々刻限切候儀有之候ハ、末々ニ<sup>而</sup>埋合、刻限無相違相動可申候、若川支等其差支之儀御座候は、手札相添差送可申候事

一一道々届物之義、随分入念取落シ持越等無之様ニ可仕候、万<sup>一</sup>取落有之候は、私共前後 (15ウ) 立合、急度尋出し、少々御苦勞掛申間敷候事

一早会所御飛脚請負之内、外々々相頼候共、請合之義ハ不及申、持合等迄、一切仕間敷候、万<sup>一</sup>御聞及被成候は、其元御飛脚御取上ヶ被成、外請合之義、末々迄御構被成候共、其節一言之儀申間敷候

一早会所之外請合者不及申、七軒之間屋之内直名ニ<sup>而</sup>出候儀御座候共、一切継立申間敷候事 (16オ)

一外々々<sup>茂</sup>、上下共継走り飛脚多御座候間、万<sup>一</sup>一道ニ<sup>而</sup>持替仕候共、面テ見寛不申候者と持替爲致申間敷候、

賃銀之義ハ、道割を以、御定之通可被下候事

右之通無相違御請負申、慥ニ入念相勤可申候、繼仕立飛脚之義付、道中筋請合之場所ニ而、如何様之義出来仕候共、私共罷出急度埒明、少<sup>茂</sup>御苦勞掛申間敷候、(16ウ)爲後日請負証文仍<sup>而</sup>如件

月日

七軒

五月十四日ニ

右之通下書相廻り候

五月十八日

一七軒屋相談、道中繼所極之事、益後と申事候由ニ今日相談相究候 (17オ)

一尾州宮小嶋権兵衛様、五月十三日出ニ書状致来候趣ハ、三州支配上り金之義、半田村へ頼遣候付、其段江戸竹本吉藏殿へ被仰遣候付、吉藏様<sup>長左衛門</sup>之返状、半田村へ来候付、懸御目候として小嶋へ来候趣也

先月廿日出之貴礼、忝拜見仕候、弥御堅勝御入被遊候由、珍重奉存候、此方別条無御座候間、乍憚御心安思

召可被下候

一熱田嶋や権兵衛様、被御頼被遊候由、委細被仰下奉承知候

一大坂や茂兵衛様飛脚 御公儀様へ御取上相止り申候付、去暮<sup>レ</sup>嶋や左右衛門様へ用事相頼申候処ニ、当正月、大坂飛脚組合下り被申、殊ニ尾州宮貝谷権左衛門様、岡崎伝馬大坂や平左衛門殿、右御兩人ヲ以、三州支配人中へ御頼被成候ハ、大坂組合之義ハ、先年<sup>レ</sup>(29ウ)御名染、何となく此後山たや八左衛門方へ御用被仰付被下候様ニ、支配人中不殘相談之上、山たや八左衛門様へ用事申付候、然所ニ、私儀へ留主中、嶋や佐右衛門様へ相頼申候間、義理合出来仕候、せつなき時分ニ嶋や様相願、今更山たやへも難申付とて、私方<sup>レ</sup>上り金貳万兩程も有之候間

三州支配不殘 嶋や左衛門様へ相願

尾州支配不殘 山たや八左衛門様へ相願

右之通、用事申付候、大方半分つ、と相定申候、貴公様ニも御世話ニ被成被下候段、扱々忝仕合奉存候、先キ様

へも、右用事相頼申候御事、能々被仰通可被下候、去冬  
が、嶋や殿支配人中へ御願被成候へ、三州中ハ不殘御徳  
意ニ罷成可申候処、(18才)御願之筋いかふ延引ニ罷成、  
扱々残念奉存候、小栗三右衛門様ニハ、山たや八左衛門  
様へ御用被仰付候、貴公様之御願ニ付、罷越様子承申  
候処ニ、最早山たや氏へ被仰渡候へハ、無是非御事ニ奉  
存候、外支配共ニ其通りニ御座候、此段能々被仰遣可被  
下候

一米相場之事

四月九日

竹屋吉藏

小栗長左衛門様

貴報

右之書面、宮が差越候而、五月廿九日ニ宮へもとし候

(18才)

一十九日、小嶋久兵衛様、鹿嶋七兵衛様、酒店直段旁御

世話礼ニ看兩種つゝ遣候

一十九日夕、当町茶番が呼来候而被仰渡候

銀六匁五分、荷物五匁八分、中国金九匁五分

右之通ニ仕候様ニと被仰渡候而、相談可仕候様ニとの

事ニ候而帰候

一廿四日、呉服町福山清兵衛殿御出被成候而御物語、江  
戸や源右衛門が請負証文、通帳、肴鯛鮑など進物仕候  
との事、然時ハ懇意ニ致候、旁々へ如此ニ候へハ、賃  
銀之義も押不被申候(破損)被仰渡候趣にて、受合申了間  
ニ成候、併福山殿被仰候ハ、先達而少々割違有之候と  
の事故、直り候ハ、其通請合可申事也 (19才)

一同日、伝馬町白子や普請出来、福徒祝義鯛一枚、海老

遣候

一十九日夕、山田屋八左衛門方早状仕廻延引之趣、急キ  
候様ニと、七軒会所が申遣候へハ、漸出来ニ而いつミ

や方へ持来候処、及延引候故、いつミやニ而請取不申  
候由付、山たやが直仕立ニ仕候由

一廿四日七軒寄合在之候ハ、尾州宮小嶋継所之義、今暫  
相待呉候様ニと、屋敷が申来候とて、北村が取次在之  
由、披露御座候

一廿三日ニハ、山城や宗左衛門殿名前披露饗応、両国茶

や二而

(19ウ)

一五月廿五日、酒店振寄合在之付、口上書差出候、左之通也、銀荷物共引下ヶ候様ニ被仰候、度々願申候へ共埒明不申候

乍憚口上書を以奉申上候

一爲御登賃銀の儀、引下ヶ候様ニ被爲 仰付奉畏候、則御相談之上被爲 仰付候御儀御座候へハ、難違背仕奉存候、弥不相替御用向幾久被爲 仰付候様奉願上候

一世上賃銀之儀ハ、各様格合を以御請負仕候事ニ御座候へハ、夥敷相違ニ相成候、世上請負之内ニ、日永荷物と申候而、道中日限無構御届申上候儀御座候、各様御用之儀、(20才)道中川間馬支御座候共、川之越さへ御座候へハ、馬越迄不相待步行越仕、馬支御座候へハ、老駄ニ式駄三駄前之駄賃を遣候而、飛脚往来仕候義共ニ御座候付、世上之賃銀ニ高下之差別御座候故、依之左之通名題書付、各様へも差出置申度奉存候、尤各様御定被下候賃銀之義ハ、違背不仕御請申上、万事是迄之通相勤可申上候、左之名題之御願申上度、如此御座

候、以上

一七六

上方金百両ニ付 賃銀

中国金百両ニ付 賃銀

銀老貫匁付 賃銀

日永荷物老メ匁付賃銀

戊五月廿五日

酒店御問屋中様

(20ウ)

一五月廿七日、当町茶番ニ被仰渡候へ、先達而書付も御出し候へ共、大勢之内ニ何角と被申候方も在之付、日永之名題も無用ニ仕候而、左之通ニ致候様ニと被仰候間、先一ヶ月、二ヶ月相勤、是非合兼候へ、重願候様ニと御座候付請申候

上方金百両ニ付 拾老匁 只今兩替相場

中国金百両ニ付 九匁五分 四匁百四拾文位

上方銀老メ匁付 七匁 此通賃銀当十二日御

同荷物老メ匁付 七匁 拂被成候筈也、九日迄

ハ前之通也

右之通ニ御勤可被成候

五月廿七日

酒問屋中

如此成書付来候

(21才)

当廿日夜九つ時撰州青木村

一廿八日酒店中不残廻し候 山形忠左衛門様向式軒やけ

申候付爲御知申候、以上

如此書付遣候

一六月朔日文右衛門病死被致候、寺ハ浅草

一同八日ニ酒店中町々江書付遣候写

酒匂川先月廿七日ハ越無御座、漸昨日ハ步行越御座

候、上方筋之儀ハ、慥成事相知不申候、此度川間馬

支可有御座候、御用向延着可仕候付、御断申上候、

以上

六月八日

嶋や左衛門

平板組中

(被遇(説不明))  
□□ 乍憚御町内順々御廻し可被下候 (21ウ)

右之通 中橋 吳服町 坂本町 かやは町 南新川

北新川 新堀 (伊勢町) 瀬戸物町 本船町 (大伝馬町)

紙 (塗や) 林善三郎 坂口茂右衛門 小網町辺銘々江

翻刻・「寛保元・二年 手板組中日記」(藤村)

一九日ニ触状出候 尾州笠寺辺一里四方、天白川堤西へ

切入水仕候、当月二日洪水也

一六月十一日ニ、上州屋伝右衛門様へ金五拾兩取替、則

預り手形取置候、式百兩借用之願候へ共、一切埒明不

申、挨拶申候へ共、源六挨拶分ニて五十兩取替遣候

(22才)

一同十日夕、住吉講行司一文字や喜右衛門様へ、十三日

参会見廻之頼申出候

一十三日住吉講江御見廻仕候而、上首尾行司方及暮罷帰

候

村上 松本 鹿嶋 一文字や 伊

丹屋 山路 一文字や 岡田安兵

衛殿 あこや メ九人

一嶋や五郎兵衛殿義、十二日出ニ罷立被申候所、高縄ニ

而急死被致候而、品川宿迄持込、山城や飛脚市右衛門

世話いたし被申候由、替り飛脚ニハ与次兵衛差上せ候

(22ウ)

一十五日酒店触、大井川先月廿六日ハ当九日迄川越無之

一七七



候、其外駿州駅路馬支にて延着仕候、御断申上度如此  
御座候と申書付

中橋 こふく町 坂本町 かやは町 北新川 南新

川 新堀(いせ町  
ほりとめ) 瀬戸物町

右之通り一枚つゝ順々御廻奉願上候

一十八日、善永寺礼物等、五郎兵衛分仕廻候

一同日、五月廿五日、廿八日、一所ニ金谷(こ)次兵衛持込、  
昨夜入今朝届、又六月二日利兵衛、五日出庄五郎兩人  
も今朝入相届候

口上

(23オ)

一今般飛脚延着之義ニ付、御吟味被成被下候段、尤至極

仕候、併世間一同ニ飛脚上下共及延引、迷惑奉存候、

又候跡飛脚延着御断申上度、如斯御座候、以上

横田川十三日午刻  
十四日未刻迄 大井川十三日申刻  
十七日辰刻迄

安部川十六日之夜越無御座候  
但し十七日夕夜越無御座  
之由

右いつれも一切越無御座候、飛脚着次第、早速御届可  
申上候、先御断申上候

六月十九日

中橋 こふく町 坂本町 かやは町 北新川 南新  
堀 南新川 いせ町  
堀留 瀬戸物町 伝馬町 (23ウ)

六月廿六日

一嶋や五郎兵衛殿所持金、残りさし引メ金五両ト錢八文、  
今夕差登せ候

同

一京新太郎所持金、差引メ銀三匁五分と錢百廿老文、今  
夕差登せ候

右いつれも書付両所共、委細ニ遣候

一嶋屋五郎兵衛殿持銀差殘、十八匁八分四りん、六月廿

六日ニ差登候

一戌六月廿五日ニ、三州酒御支配人中の手紙来候写

以手紙申上候、時分柄暑氣甚ニ御座候得共、弥御堅固

可被成と珍重奉存候

一爲登金銀太賃之義、我々共下着之砌、早速可得御意之

所、彼是延引ニ罷成候、依之打寄相談仕候所、(24オ)

当年の金百兩ニ付、賃銀八匁つ、相拂申度候間、其通

り被成可被下候、右御得意度如此ニ御座候、以上

六月廿五日

三州支配人中

嶋屋佐右衛門様

人々御中

一 六月廿九日、延命院様へ家内安全之御祈祷奉願候、代金老步差上申候

一 同日、千代倉金兵衛様へ、鯛式枚六百文ニ而買鯛遣申候

一 同日、上嶋庫太郎様へ鯛式枚、六百文ニ而買鯛遣申候  
一 嶋屋五郎兵衛殿持金改申候節、金老兩白紙ニ包、五月六日、勘定之余りと申札付有之、右金子も可登、伊兵衛殿へ渡ス、か宗左衛門、か五郎右衛門、嶋新右衛門立合 (24ウ)

一 本多兵庫守様へ、七月三日之内、喜右衛門、佐右衛門ニ相成り参上仕候

一 福嶋走り荷物、六月廿一日出、道中川支ニ而て七月二日ニ到着、六月廿六日宗兵衛同日一所ニ着仕候、右式立とも二日昼立ニ三太乗りニ而て、宇兵衛ニ持セ差登申候  
一 二日番ニ弥兵衛、九四太ニ而て差登申候、尤道中多ク御

座候而、乗り代老兩式分差登候

一 五月廿一日出天満屋便り、阿部川六月廿六日而七月朔日迄川越無御座ニ付、七月四日ニ着仕候 (25オ)

一 福嶋走り糸荷物飛脚勘四郎、六月廿二日出持上り道中雨天ニ而、七月二日ニ着仕、同月廿六日出、清六同日

ニ一所ニ着、則京都へ飛脚仕立差登申候、九日夕ニ京着、然所勘四郎義、道中糸老固打込候而承候ニ而、着之砌吟味致候へハ、別条無之候と、清六、勘四郎口申候ニ付、其通ニ而登七候所、京都が七月十日夕出ニ申

来候ハ、ひのや五郎兵衛殿行老固、殊之外ぬれ申候、別而封印すれもめ、六ヶ數被申候、福嶋へ吟味ニ遣候様ニ被申候由、新屋殿行老固も、少々ぬれ申候、是ハ段々吃致候而相届申候由、右ひのやと新屋ト老固宛之内、糸七把入遣申由、是ハ右噂之通ニ勘四郎道中ニ而 (25ウ) 封印切、糸荷ぬれヲはし取急而、七把つゝ入

違候由と奉存候、右之通福嶋へ急度申遣候 (カ)

一 七月十四日ニ、配り茂兵衛ニ、高嶋新七郎殿ニ而被仰候ハ、七月が書状ハ山八方へ遣し申候、左様ニ先取被

下候迄被仰候由、段々江源方<sup>カ</sup>願申、殊ニ荷主方申来候て、無抛義ニ付、書状被遣候、金子ハ御手前へ頼可申<sup>被損</sup>□御申被成候由

一五日印ニテ遣候へハ、四日市迄、三十式三時ニ参候、六日印六十四式分まし、金三分宛之 (26ウ)

福嶋太眞之覚

一金三兩貳分貳朱、是ハ近江飛脚持金渡方

是ニ三拾七匁五分増

ノ貳百五拾五匁、内百九拾匁、江戸<sup>カ</sup>京都迄也

残而六拾五匁ハ、福嶋<sup>カ</sup>江戸迄太ちん、此錢四ノ貳百文、此内貳太以上ハ、三ノ六百文宛飛脚渡、残り六百文宛会所徳用、それ<sup>カ</sup>ニも糸荷斗ハ仕立不申、綿荷老貳駄も相立可申事

右ハ、上店五間之衆、先年<sup>カ</sup>上店之分、少々下直ニ御

座候由

右之通源六方<sup>カ</sup>申来候

(26ウ)

覚

一糸買旅人衆直段、金三兩貳分貳朱、近江飛脚

右に三分まし

此内百九十五匁京都迄太ちん

ノ六拾七匁五分、福嶋<sup>カ</sup>江戸迄太ちん

此錢四ノ三百六文

右之内、飛脚渡方右に同、尤太数御座候節ハ、少々引遣可申義も可有御座候、或ハ百文つ、之引哉

一江戸荷物老駄ニ付、八拾五匁ニ相極メ申候

右之通源六方<sup>カ</sup>申来候

(27オ)

一塚本屋吉兵衛殿出らうそく老櫃、七月廿四日ニ入

一七月廿三日ニ、酒店町々行司衆へ、廿四日ニ参会御座

候ニ付、万端頼ニ参候

一七月廿二日、山八方<sup>カ</sup>兩人御願ニ上り申候由

一廿三日ニ裏の茂兵衛方<sup>カ</sup>嫁取候ニ付、肴越候

一右之肴、秋田新助殿へ見舞ニ遣候

一廿四日、本多兵庫頭様御発駕被遊候ニ付、川喜右衛門

御見送りニ、品川迄参候所、御料理御酒被下、其上金

子貳百疋御目錄被下置、頂戴之仕罷帰り、翌日御礼ニ

参上仕候

(27ウ)

一 福嶋荷五太、飛脚ニ渡之切ニテ、七月廿六日昼立差登候

一 七月廿八日ニ、十七屋荷物紛失之願ニ 水野下野守様へ罷出、藤沢、戸塚、川崎、加庄村、对支有之、宇助見舞ニ参候

一 御奉行様被仰候へ、此度之義、飛脚之者尤ニ存、吟味致スニハ不有、自今道中ニ、左之者有之候<sup>而</sup>へ、諸人之難義ニ罷成候故、吟味ハ急度致スと被仰候由

一 紙店衆中、八月朔日ニ御参合被成候<sup>而</sup>、直段引下ヶ候様ニ被仰、泉屋甚兵衛と兩人参候、相談出来不申、翌二日ニ御行司<sup>を</sup>手紙参候、賃銀是迄之直段ニ三割下ヶ相談相極メ申候、自今右通ニ拂可申と申来候、依之、

七日ニ泉屋之兩人願ニ参候、何分三割下ヶニ<sup>而</sup>難義ニ御座候、御直し被下候様願申候、御支配人中御留主ニ<sup>(破損)</sup>御座候由、可申聞と御座候 (28才)

一 七月朔日、未刻<sup>を</sup>大雨風ニ<sup>而</sup>、町々通路も難成、翌二日<sup>を</sup>本庄、下谷、深川迄、水入候所、二日未刻<sup>を</sup>天氣罷成候、永代はし杭七本流申候、往来不被成候、新大

はし杭三本流、往来留り申候、是ハ五日夕御普請被仰付候<sup>而</sup>、六日<sup>を</sup>往来致候

一 四日夕、諸方堤切込増水仕、本庄辺家居不残屋根斗相見、惣してせん手にな宿、かすかへ辺、屋根斗相見申候、諸方死去人何千人と云事不知

一 御公儀<sup>を</sup>、御助舟數百艘出、皆々是ニ取乗り、江戸へ上り罷在候

一 戸田川、深谷、熊谷之方右同断、高水之程難尽筆紙候一亀井戸の天神様、屋根の置瓦斗見申候、後人は<sup>ニ</sup><sup>而</sup>可察者也<sup>(カ)</sup>

一 下谷辺屋敷之内、皆々床<sup>を</sup>上、四五尺も上り申候 (28才)

一 七月七日ニ、本庄、深川、下谷得意衆へ、水見舞遣申候、進物帳ニ相記置申候

一 江戸<sup>を</sup>町人衆皆々、食かい錢扨施行致候  
一 酒井修理様御屋敷<sup>を</sup>、毎日食御出被遊候<sup>而</sup>、水入の人々ニ被施被成候

一 七月八日、七軒会所寄合御座候<sup>而</sup>、道中次所替之相談

有之

一北村手代衆、中間手紙来候由、尾州宮小嶋貝谷出入も相済申候、次所之義、二、六、九ハ小嶋へ、一、四、八ハ貝谷と申事ニ候

一堺川岸に人宿之辺高水、江戸ニ同

一中川御番所ニ而、流死人ハ御ひろい上被成候所、八日之日七百五十人有之候よし (29オ)

一八月十一日ニ、住吉講中様御状来候、左之通

以手紙申上候、先以各様弥御堅勝ニ可被成御座候、珍重ニ奉存候、我々共無異儀罷在候

一当年者、折々大雨ニ而、道中筋川支有之、御互ニ気毒千萬ニ奉存候、然者近年下り書状延着致、彼是間違多、不勝手ニ御座候所、別而今年ハ遅滞致し及難儀候事多ク御座候間、此段御考弁被成、此後延引不仕候様ニ御働可被下候、右可得御意如此ニ御座候、已上 (29ウ)

八月十一日

住吉講中

嶋屋佐右衛門様

手板組 中様

右之通申来候ニ付、十二日ニ大坂へ申遣候、書状着次第、先状御立被成候へと申遣候

一茶店参会、例年八月九日在之候所、此度之高水にて、同十八日浅草藤やにて在之候 (30オ)

一紙店参会之上、御相談在之、是迄之通り諸事三割引下ヶ候様ニと、いつミや、手前方へ書付廻り申候、依之行司村田善左衛門様、小津次郎左衛門様、右之賃にて不勝手にて御座候様、何分被下候様、御願申上候所、是斗にて寄合も付不申候との御事、依之、左之通り之願書差出し申候

乍憚口上書を以、御願申上候

一此度爲登飛脚賃銀之儀、銭高直ニ相成ニ付、引下候様被り被仰付奉畏、早速御請可申上答ニ御座候得共、当春ハ、近年無之、道中筋川々満水数多御座候付、思召之外諸懸り多御座候而、難儀仕候付、度々御願申上候処、是迄之賃銀ニ、三割引下ヶ候様被爲仰候、左様ニ而ハ、(30ウ)殊外下直成直段ニ相成、迷惑至極仕候付、思召をも不見かへり、又候以書付御願申上候、

何分宜御了簡被成下 左之通直段被仰付被下候ハ、

忝奉存候、已上

金百両上方十一匁五分 金百両宮迄十一匁

銀一匁七匁七分 荷一匁七匁

右通被仰付被下候様奉願上候 一つミヤ

寛保戊九月

甚兵衛

しまや

左衛門

紙店御行司様

右兩人ハ、八月晦日願ニ参候

いつミヤハ兵衛  
手前ハ庄右衛門 (31才)

戊十一月四日ハ、江戸附出し馬駄賃貳百五拾文ニ成

戊十一月十三日ニ、堺町高砂屋伊兵衛方ニ而、住吉講中

へ御酒 上度願ニ而、吳服町行司小沢文右衛門様、跡行

司中仁兵衛様藤や江御世話而、十一月十一日(二二)廻状認、

小沢様へ紀九様御目懸申候、尤小沢様ハ兩町行司名而添

廻状被遣候、先添状文言

一来十三日、嶋や佐右衛門殿ハ住吉講中へ、御酒進上被

成度候由、行司方ハ宜敷御披露仕呉候様、再三御願御

座候間、御揃早朝ハ御出被成被遣可被下候

十一月八日

吳ふく町行司

各様

せと物町行司

尚々嶋やハ御廻状若書落候ハ、御書加へ可成被候、

尤行司判御出し被成候

(31ウ)

住吉講御人数 (二行四人書を下にょんで記した)

茜屋宇兵衛様 ざこや市右衛門様 前田権七様 (松本内)

や清介様 中河仁兵衛様 かもや源介様 山路兵藏様

一文しや清兵衛様 前河茂右衛門様 西宮十次郎様 阿

こや喜兵衛様 村上源右衛門様 善(読不明)善右衛門様 ○太

嶋や宗八様 伊丹や吉右衛門様 かしま伝七様 神戸伊

兵衛様 満願寺や平右衛門様 林善三郎様 小沢文右衛

門様 竹屋太右衛門様 千足長十郎様 (読不明) 次兵衛

様 十文字や平吉様 ざこや弥右衛門様 坂口茂右衛門

様 津国や新兵衛様 松本次助様 岡田安兵衛様

メ廿九人

手前廻状文言

口上

俄之儀御座候得共、来十三日堺町高砂や伊兵衛方御酒進上仕度奉存候(32才)、乍御苦勞御出被下候ハ、忝可奉存候、若御用程も不奉存候へ共、何とそ不殘御揃被下候様奉願候以上

嶋や左右衛門  
手板組中

右御人数、方角順ニ相廻し様廻状認候

右廻状、十一月八日廻し度候様、小沢様へ申候処、今日賣附々日故、明日相廻可申様被仰候

十一月十二日又々別紙銘ニ遣ス

口上

明日弥無御違、乍御苦勞御出可被下候、尤御同心御座候ハ、御誘引被成可被下候、杉原四ッ切ニ致認候

名当致爲持遣ス

戌十月廿九日、卯之便道中用多候故、全手板切手板ニ致、即只今用来手板也、同十一月二日利兵衛荷手板共切手板に成、同多々便本とちニ致用候

宗左衛門

居合 善左衛門(32ウ)

坂本町いせや太兵衛方ニて御寄合

一戌十一月晦日晝、西宮講中御寄合在之候而呼来候、西宮連中左之通連判ニ而、当地連名左之通之御方へ、廻状来候ハ、其元山たや八左衛門義、名染も無之、其上是迄不相渡候付無心許候由、依之当方ニて江戸や源右衛門組中、八左衛門請合之証文取置候間、自今用向多少共相渡候様ニと申来候付、已後之義、其段可相心得旨被仰渡候、併年内餘日無之事、明春ハ右之通ニ可仕候間、一通申渡候との事、則返状ニも相心得候段申遣候、上方金主之事候へハ、(33才)無是非候と被仰候

右之儀ニ付、廿九日、卅日、両日ニ住吉講(破損(説不明))町

々酒問や行司方へ頼置候、其趣意ハ、上方ハ相替候義申来候ハ、宜御返事奉願と申事申廻り候

十二月六日

一京橋馬屋<sup>江</sup>金拾両かし申候、即手形箱ニ有、出番毎々貳百文つ、引遣可申答ニ候

十二月十一日

一町内太々講帳三冊入箱之懸金五拾兩(カ)分トセに貳百九拾四文請取、尤内田宗兵衛殿ヲ引渡書付有之 (33ウ)

亥閏四月九日、七軒早走り之者、越前や八右衛門内権六と申者、追落ニ荷物とられ

嶋長門守様御頼申上候処、追落相知候ニ付、六月十二日ニ越前や八兵衛御召ニ而、八兵衛、権六共ニ御赦免、八兵衛義ハ、外之商賣ハ無御構、七軒早飛脚相勤申義御差留メ有之、十三日朝六つ時、手前御召ニて被仰付候ハ、其方儀ハ、時之行司故カリ合候、相知候上ハ、外飛脚屋共と同事更と被仰付候、山城や義ハ、格別之義詮義之事有之故御免なく候